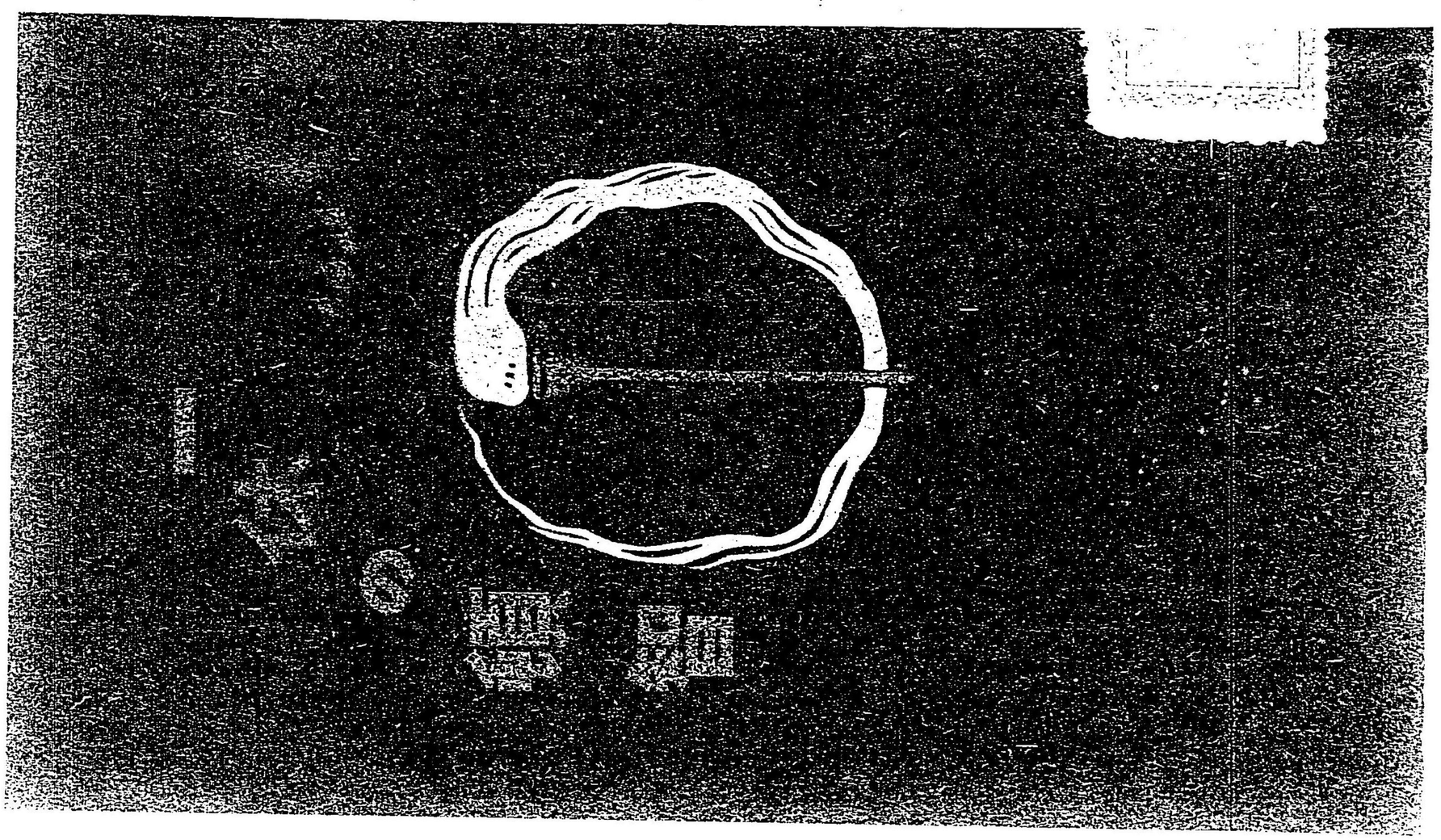

# 序

## 大和魂

花も紅葉も數かぎり多ければ千種の匂ひと深く人の心を動かせど櫻に增すはなかりけり「吉野の山の春の曙朝日に匂ふ花にこそ大和魂なぞふなれ此魂は日の本の人の身ながら拔分て頭に宿る物ぞかし國を守らせ世を愛ひ直く正しき誠もて君を敬ひ親を思ひ人たる道にいさをしく心の柱ゆるぎなく彌かたくだてゝつかへつゝ治まれる日も亂れ世も貴き賤しき拘らず國の爲にと一筋に勤むる人ぞかしこくも此魂持たる

治安
内交

しるしなる斯るしるしの著るしく仰ぎ仰く臣たちは
菅原の神和氣の君楠の朝臣を初めにて昔も今も數し
らず絶る間もなく産れ出花の匂ひ長へに顯す人のあ
ればこそ動かぬ「國の寶なれ」譽れは文に輝し幾千代馨
り行らん日の本の大和魂めでたしや

明治丁未の秋　　南勢記す

特63
521



# 頓智談庫

## ㊀一休の頓智

柴田薫講演
今村次郎速記

### 第一席　禪師の生立ち

今回御好みに依りまして一休頓智談を言上いたします、紫野大徳寺の先住を養叟禪師と云つて、眞珠庵に樂隱居をいたして今年六十餘才、御手許には哲梅、巴龍、周庵、默齋、宗純など云ふ、十四五才を頭として七八才の子供ば

かり使つて居られます、此宗純と申しますのが後に一休禪師、後小松院の皇子、御生れになりましたのは應永の元年正月元日、一説には三日とも申しますが、御腹は日野中納言の御息女照子樣と申し、後に藤侍從と申上げた御方、宗純御幼名を菊丸と申上げ、御幼年の折から悉く御惡戯が烈しく、御殿から御庭を始終駈歩き、少しも沈着いて居ない、乳母を丹後の局と云ひ、非常に色の黑い處からお黑の方と人が申しまする位ゐ、或る一日シメ〳〵と御意見をした墨貴所樣は尊とき御身に渡らせられ、ゆく〳〵は天下を御治め遊ばすべき御身の上、御幼年とは



申しながら、餘り惡戯が過ぎまする、ちと御行儀を御嗜み遊ばし、且つ皇國の寶、和歌などの御嗜みを御心懸け遊ばさんければなりません、其昔菅原道眞と申す者が七才の時「美くしき紅の色なる梅の花和子が顏にも附けべかりけり」と一首の歌を詠じ、衆人大いに感じたと申す話さへこざいます、貴所樣も以來はちと御行儀を御直し遊ばせ」と御爲を思ひますから御諫め申した、處が後年に紫野大德寺の一休大禪師となり、活佛の聞えを取つた御方、中々乳母の言葉などを、さうかと言つて聞いては在ッしやらん、お黑、道眞と申す者が歌を詠んだと申すが、

麿も歌などは直ぐ詠む　墨貴所様に出來ますか　菊出來る　黒「御出來遊ばすなら御詠み遊ばして御覽じろ　菊然らば詠んで聞かせる、謹しんで聽け　墨何と仰せられまするか　菊降る雪が白粉ならば手に取りて黒が顔にも附けべかりけり」お黒の方が怒つたの驚いたの　墨「オヤ〳〵どうも呆れた貴所はお口の惡いお方、致し方がございません」とプン〳〵怒つて仕舞つた、是が御幼年でございますが、一を聞いて十をお悟り遊ばす御器量でございます。

スルと或一日藤侍從が菊丸様に申上げましたには　藤「南朝の忠臣に名和伯耆守長年、新田左中將義貞、北畠顯家、



楠正成などゝ云ふ者、悉く忠義を盡しましたが、運拙なく何れも此世を去りました、されば只今は足利家の勢ひ盛でございまするが、御成長の後南朝の忠臣を御取り立て遊ばされまするやうに」と申上げると御幼年ながら何か感ずる所があつたものと見え　菊「其名和長年、北畠顯家などは何れへ參つた　藤「此世を去つて幽冥界の冥土へ參りました　菊冥土と申すのは何所ぢや　菊此の世を去つて遙か彼方でございます、自からは女子の事でございますから、お供は成り兼ねまするが、是は僧侶でなければ叶いません　菊「ハ、ア誰が宜いな　藤左様で、當時東福寺の住職は悉

ごとく道德堅固の名僧の由に承知いたしました菊然らば其者に面會をいたさう」と一旦仰せ出されましてはお止まりはございません、直ぐに用意を遊ばして、惠日山東福寺へお出でになりました、住僧が早速立出でまして御案内をいたし僧「能うこそ御尊來遊ばされました、何事の御用でございますか菊「今日其方方へ參つたのは、楠正成、新田義貞、北畠顯家、名和長年、是等の者へ會ひたいと思つて參つた、案内をいたして呉れろ」東福寺の住職も大きに驚ろいた、御幼年とは申しながら、大變な事をいつてお出でなすつた、冥途へ御案内は出來ませんといつ



て斷はつても、御幼年の事だから中々お肯入れがあるまい、不圖思ひ付いたのは紫野大德寺の華叟和尚、二三度問答をして負けて居りますから、其の復讐しに、大德寺へ向けてやつたら嘸彼が困るだらう、一ッ弱らしてやらうと思つて僧「ヱ、仰せの趣むき、委細畏こまりましたが、何分當惠日山東福寺は勅願所にございまして御用繁多にして、遠い處へ御供の儀は相成りません、紫野大德寺住職に華叟といふものがございまして、此者へ御供仰せ付けられまする、やう菊「ア、左樣か、然らば華叟の許へ參るであらう」ソコで紫野大德寺へお出でになる、大德

寺は突然のお成りでございますから、所化番僧等大きに狼狽をして立騒ぐ中に、大和尚華叟禪師、法衣の袖を搔合せ、お出迎ひ申上げ、一通り御挨拶を申上げると菊華叟と申す者は其方であるか、今日參つたのは餘の儀でない、楠正成、新田義貞、名和長年、北畠顯家等の居る處へ案内をいたして呉れい、彼等に對面をいたしたく參つた」、華叟禪師驚ろいた、大變なことを仰せられる華「仰せの趣むき、畏こまりました、併し彼等の居りまする處は現世でございません、幽冥界と申し、世界を離れました處、されば私儀は僧侶の事で修業をして居りまするから



夫へ參られもいたしますが、貴所様はまだ佛法御修行を遊ばしませんから、御供を申上げる事は叶ひません菊「ウム、佛法を修行いたしたら參られる事が出來るか華「夫は必らず參られます菊「然らば麿も修業いたすであらう」と仰せられたのは、深い思召しがございますので、御自分さへ出家になつて了へば、何事もないといふ、茲に意味のございまする處を詳しく申上げまするとと、諄々しうございますから、大體を申上げる中にお分りに相成ります。大略をいたしますが、ソコで華叟禪師が委細畏こまりましたとお受けをする、附いて來た者から大納言

へ申上げると、上に於ても御許しになつて、遂々大德寺の華叟の弟子といふ事になりました、處が大德寺の寺中に眞珠庵といふのがございまして、之へ隱居をして居りますのが、先住の養叟禪師、六十餘才になり、十五六を頭に七ッ八ッ位ゐの子供ばかりお側へ多くお置き遊ばす、尤とも子供といふものは誠に無念無想の、者でございますから、養叟禪師の左右には子供ばかり、是へお置き申したら宜らうといふので、華叟禪師から養叟へお賴みになりまして、早速眞珠庵へお移し申した、處が御身分で在せられるから、師匠の禪師を呼び捨てだ、御用がある



と養叟〳〵と仰しやる師匠の巾の利かない事、どうも扱かひ難くつて仕方がない、他にも小僧が幾らもある、何分始末に惡いから、之を日野中納言へ申上げる、ソコでお上から御沙汰になつて、弟子といふ事になつて見れば遠慮はない、師弟の禮は正しくいたしたが宜い、苦しくないから、嚴しく修業をいたさせろ、菊麿樣にも以來養叟と呼び捨てになすつてはならん、お師匠と呼ぶやうに と御沙汰がムいました、御發明でございますから、早速御承知になつて、お師匠樣と温順く仰しやるやうになりました、併し只今までの菊丸君といふお名前ではどうも

呼び難いから宗純といふ名を命けました、一休和尚の眞實のお名は宗純、以前から居りまするお小僧の巴龍、周庵、默庵、哲梅などゝいふ、宗純と同じ年位ゐの者が多く居ります、養叟禪師が養宗純や、茶碗を持つてお出で宗「ハイ」立つかと思ふと立たない、側に居ります他の哲梅といふお小僧を呼んで宗「コレ〳〵茶碗を持つて參れ哲「ハイ……養「宗純や、硯を玆へ出さつしやい宗「ハイ……巴龍、硯を此處へ出さつしやい」座り込んで居て用の取次をする、他の小僧達は驚ろいて、是は大變に用が殖えて了つた、仕樣のないお弟子が出來たものだと驚ろいて居



ると、師の養叟禪師が、頻りに宗純を勦はり、敎え方が宜いから自然お師匠さん〳〵といつて、此頃では大分温順くなりました、他のお小僧も此のお方は貴ひお方といふのを知つて居りますから、自づと宗純を敬ひます。

## 第二席　後ろ向きの讀經

或晩の事で養「宗純や宗「ハイ養「本堂へ參つて御佛前の燈明を消してお出で宗「ハイ」ズイと立つて行つた、例もは容易に立たない、他の小僧へ吩付るのに、今日は快よく立つて行つたから何をするかとソッと養叟禪師が後ろから尾

けて來て見ると、佛前へ參りまして燈明をプッと一息に吹消して歸つて來た、養叟禪師何喰はん顔をして「どういたした宗」へエ、消しました「お前何故團扇を持つて消さない、口氣を以て消すといふは以ての外の事だ」宗へエ、口では惡ふございますか「惡いかといつて、凡俗の口氣を掛けてはならん宗ハア左樣でございますか、以來は氣を付けます」といつて其晩は寢て了つた、翌る朝、養叟禪師本堂へ來てお經を上げる、お弟子達も皆な其處へ來てお經を上げて居る、フト宗純を見ると、皆一同師の跡に並んで御本尊へ向つてお經を上げて居る中に、宗純一人



は御佛前の方へ背中を向けてやつて居る「コレ〳〵宗純、何といふ不行儀な拜み方をする、後ろ向になつてお經が讀めるか」宗へエ、凡俗の口氣を掛けましては佛へ相濟みませんから、私は後ろ向でお經を讀んで居ります」、養叟禪師も呆れて了つた、迂濶叱言もいへたものではない、昨夜の叱言を復讐しを喰した、どうも始末に往かん奴と驚ろいて居ります。

## 第三席　禿げ太皷

スルと養叟禪師の碁の對手をする、紅屋仁平といふもの

がある、毎夜のやうに參りますが、好きな道だから、例も刻限を取外し、九ッ八ッになる事がある、其間巴龍哲梅などゝいふお小僧が寢る事が出來ない、迷惑らしく側に座つて居ります、そこでお小僧が愚痴を溢す、那の紅屋の禿頭、どうかして來ないやうしたいものだといふのを宗純が聞いて宗よし、私が以來來ないやうにする○「へえ、そんな事が出來ますか宗出來るとも〳〵、譯はない、板を一枚持つてお出で○「何うするんで宗何でも宜いから早う持つて來い、直ぐに墨を摺つて……よし〳〵」其板へ宗純が『皮を着たるもの門内へ入るべからず』と書



いて宗サア是で宜い、是を門の處へ立つて置けば決して入つて來ないこと、實に奇妙だ……」疱瘡除だと思つて居る、宗純の言ふが儘門の處へ立つて置いた、紅屋は相も變らず碁を打たうといふのですたこらやつて來て門を入らうとすると新らしい立札が出て居る、何だらうと見ると、皮を着たる者、門内へ入るべからずとしてある、につこり笑つて、はあ、毎晩乃公が長つ尻をするので小僧達が迷惑をする、そこで乃公を追返さうというので此んなものを立つたのだらう、よし〳〵と頷づいて入つて來た、といふのは此の紅屋仁平は老人で、寒さを凌ぐ爲

に皮の胴服を着物の上へ着て居る、宗純がばら〳〵と飛んで來て宗オイ〳〵紅屋乞ハイ宗お前供前に立つてあつた札を見なかつたか乞見ました宗見たら何故歸らない、お前は皮を着て居るではないか、門内へ入つてはならん乞アハ、、、、宗純さん、貴所はお悧口のやうでも子供だ、成程私は皮の胴服を着て居るが、何で入つて惡いと仰しやる宗されば、主上臨幸の佛地である、不淨の獸類の皮など來て居つては汚れるから門内へ入つてはならんといふのだ乞夫は宗純さん往けません、本堂にある那の太皷、那れは何で、獸類の皮で張つたのではございませ



んか、宗純さん貴所が幾ら仰しやつても之は私の勝だ」ズイと入らうとするを、宗純何思いけん忽ち本堂へ駈込むと撥を持つて出て來て宗ヤイ紅屋、此の本堂にある太皷はな、獸類の皮で張てあるから、朝晝夜、日に三度づゝ撥が當る、能く考がへて見ろ、貴樣が入れば此の通りだ」と太皷の撥で紅屋の禿頭をポカ〳〵毆り付けた、紅屋も驚ろいて這々の體で歸つて了つた、他の小僧は、今夜は早く寢られると喜こんで居ります、處が養叟禪師は今に紅屋が來るだらうと碁盤を出して待ど暮らせど參りません、ハテどうしたのか那んな好な人が來ないところ

を見ると加減でも惡いのかと翌朝になつて態々紅屋へお出でになつた仁「オヤ是は態々お出ましでは恐れ入ります養「イヤどうした、昨夜其方が來ないので氣分でも惡いのかと思つて見に參つた、見た所別に變りもないやうだな仁「ヘエ、別に身體が惡いといふのでもございません、實は是々でと」昨夜の物語りをしたから養「イヤ夫はどうも惡い事をする奴だ、夫とは知らんから大きに案じて居つた、宗純へ申付けるから今夜は來さつしやるが宜い仁「ヘエ有難う存じます」と其晩は來るには來たが、例ものやうに長ッ尻をすると、又宗純さんにどんな目に出遇ふか分ら



ないと思ふから、大概にして歸つて了ふ、何事に付けても此の宗純が一を聞いて十を知るといふ發明でございますから、斯ういふお方は早く剃髪をおさせ申したが宜らうといふので、八才の時に養叟の弟子になつて九歳の時に剃髪、日野中納言殿へ申上げまして乳母のしづといふものが大德寺の眞珠庵へ參りまして、彌よ今日宗純樣剃髪をする、多くの僧侶集まりまして、其の式を上げました、養叟禪師宗純のお頭へ養「棄恩入無爲眞實法恩者」といひながら剃刀を當てます、此の時に有難うございますとお禮をいふ事に定つて居るのだが、どうしたのか宗純は

禮をいはない、ソコで又養叟が聲を張上げて「養叟恩入無爲眞實法恩者」と高らかに仰しやつた、けれども矢張り何とも仰しやらん、ハテどうしたのかと思つて居ると、ズイと立上つてバラ〳〵と本堂の眞只中へ來て突立ち、四邊を見廻して、有漏路より無漏路へかへる一休み雨降らば降れ風吹かば吹け」養叟是を聞いてハタと膝を打ち「宜いかな一休、天晴れなり」と賞美をいたしました、一山の僧侶一同に手を打つて感心をし、實に宗純殿は恐れ入つた、此のお方が成長の後は當山の宗風を天下に輝やかすべきものだと、玆に人綽名して一休樣〳〵と申しま



した、眞の名は宗純、併し一休の方が名高くなつたのは此時の歌に依りますのでございます。

或一日の事で養叟禪師が鮭の鹽引を貰つたが、流石に弟子達の見る前で食べるのは如何と、遠慮があるから夜分皆な寢靜まつた處で、コツソリ夫を燒いて召上つて居る、一休が便所へ立つて座敷へ歸らうと通り掛つた師匠の次の間、大層旨さうな匂ひがする、ガラリと襖を開けて「ヘエお師匠さん宜しう召上れ」養叟は驚ろいたが、今更隱にも隱されず仕方がないから養「イヤ一休、まだお前寢さつしやらんか」「ハイ、大層宜い匂いがいたします

が、何を召上つて在つしやいました養ア、之か、之は其の何だ、詰り、……一「へエー詰り、何でございますな養詰りその、鹽引の鮭だ一「へエー、斯樣なものを召上つても召上つても差問ございませんか養ア、私は引導を渡して食ふから差問はない一「へエー、どんな引導をお渡しになります養汝元來枯木の如し、水中に放つといへども能く泳ぐ事難し、夫よりは我が腹中に入つて佛化を得よ、喝一「夫だけで養さうだ一「では引導を渡しさへすれば食べても差支へございませんな、へえお喧ましう、お寢みなさい」と退つて了つた、翌る朝になると一休、何を思つ



たか庭へ飛出して、大きなお泉水がある、其中から、目の下一尺もあらうと大きな鯉を掬ひ上げて臺所へ持つてお手料理、他の坊主は驚ろくまい事か、是は大變、一休樣が氣が狂つた、早くお師匠樣に告げろといふので、養叟へ是々と話したから捨て置けない、早速臺所へやつて來て養コレ一休、何故左樣な惡戯をいたす、殺生をしてはならん、どうしたのだ一「左樣で、私は引導を渡して食します、どうも此の精進物ばかり食べて居りますると氣力が衰ろえます、お經の稽古をするにも疲れて居ては往けません、夫ゆへ此の鯉を食つて氣力を養ないます、引

導を渡して食べますれば差支へございますまい養フムお前引導と食ふ事を知つて居るか　一「エ、能く知つて居ります、何といふて引導を渡す、　一「汝元來生木の如し、水中にある時は能く捕ふる事難し、夫よりは愚僧の腹に入つて糞となれ、喝、」どうでございます」養叟禪師も呆れて終つた養今日の處は許すが以後はならん、氣を付けなさい」と叱言はいつたが心中少からず驚ろいた。

## 第四席

### 虎の衝立（鎌倉街道）

扨一休お小僧の評判が大分高く相成りまして、當時足利三代將軍義滿と仰せられ、大德寺へ對して、華叟養叟兩人一休を召連れ出仕いたすやうにいふ、ソコで早速華叟養叟の兩禪師、一休を連れて室町將軍の御前へ出る、案内に從いて廣間に通りまするとと上段に當時足利將軍義滿、左右に居流れましたるは、桃井若狹守、細川式部太夫、仁木左京太夫、二階堂信濃守其他諸大名、堂々と着座をいたし、實に晴やかなお座敷でございます、華叟養叟の兩禪師は法衣の袖を搔合せ、念珠を爪繰、徐かに手を仕いて謹しんで將軍家へ御禮を申上げる、處が一休さんは頭などは下げない、御幼年ではあるが其處は大權識なも

の、何の足利義滿などは元乃公の家來だといはぬばかり、ジッと義滿の顏を見て居る義コリヤ、養叟、一休と申すは夫なる小僧か養御意にございます義コリヤ、一休と申すか、殊の外發明の由承知いたす、之なる衝立に書いてある虎ぢや、毎夜惡戲をしてならんから、其方之を縛つて見よ、手際を以てやれるかどうぢや」華叟養叟の兩人、何とお答へをするか、御無理なことを將軍家が仰しやるが嘸一休が困るだらうと振返つて見ると一休小僧平氣なもので「委細承知いたしました、惡い事をいたしまする虎は早く縛つた方が宜うございます、どうか繩をお貸し



なすつて下さいまし義コレ、繩を貸して遣はせ」とあつて一筋の繩を持つて來る、ズイと立つて一休が尻ッ端折をして、坊主頭に鉢卷をなし、繩を持つてバラ〳〵とお衝立の側へ飛んで來たが、夫に猛虎が書いてある、どうも大層結構な繪で、如何にも千里の藪を跳り越えるかと思ふやうに活々と書いてある、其處へ突立つたが繩を持つて大手を擴げ「オイ〳〵其處に居る小父さん、私が茲で斯うやつて居るから向ふへ廻つて追出してお呉れ、さうすると私が縛るから」仁木右京太夫驚ろひた右厄介な事を乃公の處へ持込んで來た、繪に描いた虎が追出せる

ものでない」「追出すことが出來ないものなら縛る事も出來ない」是は理窟だから足利義滿も驚ろいた、成程、是は大變な奴だと思つて義「イヤ天晴發明なり、豫て聞き及んだが如何にも感服いたす、時分どきぢや、支度を取らせる」といふので、ソコで華叟養叟一休一同へ膳部を下される、兩僧が見ると魚肉が澤山に付いて居ります、葷酒山門入不許といふ位ゐの禪宗だから箸を付けずに只見て居る、スルト一休は遠慮もなく、突然箸を取るとムシヤ〳〵端から片を付けて、付いて居た魚を殘らず喰て了つた、義滿公見て居たが義「如何に一休、其方は只今魚肉



を喰つた」「ヘエ、下し置れました御膳部、有難く頂だきました義「ウム、出家であるながら、如何に幼年とは申しながら、遠慮なく魚肉を食ふといふは如何なる考がへであるか」「左樣でございます、人間の吭には、食道氣道といふ二ツの道がございます、此の食道は鎌倉街道でございますから、餅屋も通れば豆腐屋も通る魚屋も通る、只今魚屋が通つたのでございます」滿座の大名之を聞いて驚ろいた、旨い事をいつて言ひ拔ける、魚屋が通つた、之は感心と互ひに顔を見合せて居ると、義滿公が義「コレ、其方の吭は鎌倉街道」「ヘエ義「魚屋も通れば餅屋も通ると

いへば、四民共に通る街道、定めし武士なども通るであらうな」「ヘエ、何でも通ります」義「左様か」傍はらにあつたるお佩刀の柄へ手が掛、るとギラリと拔いて一休の眼の前へ突付け義「一休、汝の吭は鎌倉街道とあれば、此の武士を速やかに通して見ろ」ハタと睨まへた、サア華叟養叟の兩禪師はヒヤ〳〵して、どうも萬に一ッ間違ひがあつてはならんと手に汗を握つて居る、一休様のお顏を見ると少しも驚ろく氣色もなく「御意にございます、今日北條は斯様盛んに相成りましたが、南朝の殘黨未だ諸所に徘徊いたします、されば之へ參りましたのが南朝の殘黨



相成るやも知れません、故ゆゑに身分を調べまするまでは關門に留め置きまする」とズイと立上つてズカ〳〵と義滿公のお側へ遠慮もなく駈寄り、お手に持つた刀を矢庭に取上げて了つた、是は御年僅かに十二才だが、一休様が義滿へ暗に仰しやつた、世間では一休様を南朝の君に取立るといふ噂さがあるが、お前さん決して心配しなさる事はない、一度佛門に入つた上は大丈夫だから安堵をしろと、所謂意味深長の處でございます、南朝の殘黨ならんも知れんから取調べた上通す、夫までは關門に留め置くといつて、刀を取上げた、義滿ハタと膝を打ち義「イ

ヤ如何にも尤ともの一言、然らは其方に夫は預け置くぞ」と手づから其の刀を鞘に納めて一休へ下すつた、されば後年に至つて一休禪師の傍はらに始終大刀を飾つて置きましたのが、此時足利三代義滿公から頂いたお刀でございます、義滿公殊の外の感服でございまして「さて養叟華叟、近日義滿大德寺へ參つて茶を馳走になる、夫れまで是を預け置くから左樣心得ろ」とお渡しになつたのは三國傳來蛇鉢の茶碗といふ天下一品の結構な茶碗、ソコで兩僧之をお預かりをして各々に褒美を頂だいて退つた、扨四五日經まして將軍家大德寺へお成りといふ事になりまして、養叟華叟お出迎ひをして奥へ招待を遊ばす、種々お話しを申上げ、之から愈よ茶の湯が始まらうといふと、此の眞珠院の巴龍、哲梅などゝいふ、お小僧が集まつて○「此間お師匠さんが御殿からお預かり申した蛇鉢の茶碗、夫で今日將軍樣がお茶を召上ると御殿へお持歸りになつて、モウ拜見をしやうといつて容易に見ることが出來ない品、今の中に拜見をして置かふ、ア、結構な茶碗だ」、と見て居ると一人が○「ドレ私しにも見せて下さい△私しにも」と兩方から手を出して引合ふ、途端といふものは怖いもので、取落したから堪りません、忽ちポカリ

茶碗が二ッになつて了つた、サア一同の子供は眞蒼になつて、將軍樣から預かつて來たお茶碗壞して見れば申譯がない、どんなことになるかと一同蒼くなつて居る、處へ一休がやつて來て 一「オヤ〳〵、皆などうたんだ、青い顏をして ○「一休さん大變な事をして了つた 二「どうした ○「お師匠さんが此間御殿から預かつて來たお茶碗を壞して了つた 三「ナニ茶碗を毀した、ドレ〳〵お見せ」と手に取つて見て居たが又其處へ投り出したから粉微塵になつて了つた ○「アレ一休さん餘計なことをして、毀した上へ毀してどうする 二「イヤ心配するな、お前達が叱言をいはれないやうに此の罪は私が引受けた ○「一休さん大丈夫かへ 一「大丈夫だ ○「ちやアどうかお賴み申します」皆一同の者が喜こんでドン〳〵行つて了ふ、一休は右の毀れ茶碗を袂へ入れて華叟禪師の許へやつて參り 二「申上げます、華「何ぢや 二「只今雲水の出家が參りました、華叟禪師に一問答參りたいと申します、今日將軍家お成りでいろ〳〵取込んで居るから、問答などをする暇はない、夫は殘念、然らば何日參らう、何日といつても何だから、お師匠さんは問答は出來ないから、私が師匠さんの名代にお前と問答をする、何でも聞け、速やかに答へて見せるといふと、

其の雲水の坊主が猪狐才な小僧、然らば生ある者はと斯様申しました華「何と答へた」「一寸考がへが出ません、返辭が遲かつたので突然其坊主が如意でポカリと打ちまして、此んなに瘤が出來ました」と頭を突出して大きな瘤を見せた、嘘ばかりいつて居る、先刻相撲取りをして拵らへた瘤だ、華叟禪師之を聞いて華「お前日頃の發明にも似合はん、何故速やかに返辭をいたさん、生ある者はといつたら必らず死すと答へるのだ」「へエどういふ譯で華「イヤ愚かしきことではないか、行く者は歸り、生るゝ者は死ぬ、往て復らざるはない」「へエー、夫から形あるものは



はと斯様申しました華「ウム、何といつた」「まだ考がへ中で出ません、スルと如意で打ちました華「さて〳〵不束なことではないか、例に似合はん愚かの事をしなさる、形ある者は必らず碎けると何故言はん」「へエ、どういふ譯で華「比喩て言へば彼の戸棚の上に道具が載せてある始終アヽして置けば何事もないが、一朝地震でもあつて棚から道具が落ちると必らず毀れる、されば形ある者はといつたら必らず碎けると返事をいたせ」「成程、道理で茶碗が破れました」といひながら袂から蛇鉢の破れたのを出した、華叟禪師又此の小僧にやられたか、茶碗を毀して叱

言をいはれぬ爲めに問答に事寄せ、形あるものは必らず破れると乃公の口からいつたのだから今更叱言をいふ譯にも往かない、又叱言をいつた處で仕方がないといつて將軍家からお預かり申した三國傳來の品、上へ申譯がないから一方ならずお困んなすつて、一休は叱らないが、此の次第を義滿公へ申上げる、スルと將軍義滿公大きにお怒り、仮令一休は貴とき御方の御落胤にせよ今は養叟禪師の徒弟、斯樣な疎忽を働らいては其分には捨て置けん、早々是へ呼べ、挨拶の致方に依つては手討にいたさなければならんとお目通りへ一休をお招きになる、處が却つて一休が將軍へ諫諫をするといふお話し。

## 第五席　蛇鉢の茶碗

三國傳來の蛇鉢の茶碗といふ天下一品の名器を打毀したに就て、養叟華叟の兩禪師が、別に叱言は言いませんが、併し已を得ませんから、將軍家へ此段を申上げると、義滿公殊の外のお怒り、縱や如何なるお身分の御方でも、斯る疎忽をいたしたるを其儘に捨て置く譯には往かん、次第に依つたら手討にいたす、早々召連れて出ろといふ、兩僧も心配はしたが據どころなく宗純を同道して將軍御

前へ出でました、宗純は少しも怖るゝ樣子なく泰然と膝へ手を突いて控えて居ります、義滿大眼を睜いてハッタと睨み義如何に宗純、天下一品の名器を打碎き、小兒とは申しながら捨て置く譯に相成らん、申譯あらば速やかにいたせ、言ひ譯なくば手討にいたす」と傍はらにあつたお佩刀の柄へ手が掛つて、ッカ〳〵と前へお進みになる、華叟養叟の兩人非常に心配をして、宗純の樣子如何にと見て居る、滿座の諸侍手に汗を握つて控えました、一休は少しも惡びれる氣色もなく「高砂の尾上の鐘も破れるなり土でこねたる茶碗大事か」と響き渡る大音で仰せられ



た、義滿公之を聞いて感ぜられ、小兒ながら剛い事をいつたものだ、之では叱言が仰しやれんから何ともいはずに居る一休大音に「第一天下の名器といへども泰平の玩物、國家の用に相立つものでもない、此世に貴ときは人の命、如何な名器にせよ打毀せば忽ち人の命に拘はる如き物は、却つて無い方が宜い、一體今の役人は賄賂を事とし、行ない正しからず下々の者大いに難儀をする、役人は杉の如く直ぐなるを宜しとすれど、皆曲つて松の如し、今の役人を例へて唐崎の松といふ……」遂々松にして了つた、滿座の役人は冷汁をかいて一人として顏を

上げる者がない、義満公殆んど感服をして義「イヤ宗純の申譯一々最ともに心得る、毀れた茶碗は其方へ取らせる」と忽ち御機嫌が直つて無事にお歸りになりました、實に一休の頓智には養叟も舌を卷いて感心した。

## 第六席　小鳥の引導

スルと其の翌朝の事で、門前の花屋の婆さんが婆「宗純さんお早ふ」「イヤ何だへ大層早く婆「禪師様は在つしやいますか」「お師匠さんはお留守だよ婆「オヤさうでございますか、お願ひがあつて參りましたんですが……」「何の



用だへ婆「ナニね、兼々私が子のやうにして置いた四十雀が昨夜落命て了つたので、どうかマア禪師様に引導を願ひたいと思つて參つたので」「アヽさうか、ヤレ〳〵夫は可哀想に、夫れではお師匠さんの御名代に私が引導を渡して上げやう婆「ヘエー、宗純さんお前さんが……」「妙な顏をしなさるな、四十雀の引導なら私で澤山だ婆「ハイ、他のお方と違つて小兒でも宗純さんなら評判のお方、では一ツ貴郎に願ひます」「よし〳〵だがお布施を持つて來なければ往かない、只では引導は渡せないから、幾ら持つて來た婆「二百持つて參りました」「よし〳〵、其布施

を此方へお出し」お布施を二百取つて四十雀を此方へお出し他のお小僧は之を見て○「ヤア又宗純さんが何か始めた、引導を渡すといふが、どんな事をするか」と之からグルリと周圍を取卷いた、宗純四十雀を一寸摘んでブラ下げて

「エヘン、萬物の靈長たる人間さへ定命五十年、汝小鳥の分際で四十からとは生過たり、喝……之で婆さん宜い、極樂往生疑ひなしだ」婆「夫ばどうも有難う存じます」と婆さんは喜こんで歸つた、他のお小僧達は之を聞いて○「那んな事をいつて遂々お布施を瞞着して終つた、……お師匠さん」何だ○宗純さんが今小鳥に引導を渡して門



前の花屋の婆さんからお布施を二百取りました「ウム、どんな引導を渡した○「是々でございます」と聞いて養叟手を打つて感心をして成程此奴面白い」といつて大層賞めました。

## 第七席　片われ月

兎角いたしまする中に其年も暮れまして春となる織屋の竹齋といふ者から毎年餅を送ります、是は西陣織の元祖でございまして、阿母が肥前長崎の女郎でございまして親父が朝鮮人子供の時に大明へ渡りまして織物を學んで、

日本へ歸つて始めて西陣織といふものを工夫をした、是は大德寺の檀家で、養叟禪師とは殊に懇意にいたして居ります、相變らず今年も送つて來た、見ると旨さうだから一休お小僧、師匠さんの歸らぬ中に一ッ食てやらうといふので、圓いのを二ッにズバリと眞中から切つて、之から食はふといふ途端に養叟が歸つて來た仕方がないから半分懷中へ押込んで「へエお師匠さんお歸んなさい養「ハイ今戻りました」といひながら見ると一ッあるべき餅が半分しかない養「是は何だ」「ハイ、竹齊から屆きました養「ア、さうか」といつたが合點が往かない、一休の懷中が膨



れて居るから此奴半分隱して居るな、けれども下手な聞きやうをすると直ぐに言葉尻を取つていろ〳〵な事をいふ、どうして呉れやうと養叟暫時考がへて居たが養「十五夜の月は圓滿なるものを」と大きい聲でいふと直ぐに一休が「雲にかくれて茲に半分」と懷中から餅を出した、養叟苦笑ひをして、養「イヤ今の答へが面白いから夫は其方にやる」と褒美に貰つた「サア皆な茲へ來てお食べ、お師匠さんから貰つたから……」貰つたものだ、大勢を集めて其餅を食つた。

## 第八席　毒菓子

二三日經つて養叟が茶を入れて、年を老ると意地が汚ない、何か菓子を食べて居ると、ガラリと襖を開けて「へエお師匠さん養誰だ、ア、一休か」「何をお食りなすつて在つしやる養菓子だ」「へエ、大層旨さうでございますな養意地の汚ない奴だ、食物といふと直ぐにやつて來る、是は私のやうな年を老つたものが食べると決して差支へはないが、お前のやうな子供が食べると毒になる、子供の食べるものではない」「へエ、年を老つた人は何事もご



ざいませんか、子供が食べると毒になりますので養さうだ、毒になつて死ぬ」「オヤ〳〵夫は大變だ、そんなものは迂濶手が付けられませんな養どうして〳〵、子供は手を付けても往けない」とソコ〳〵に戸棚へ入れて了つた、ズルト養叟が用事が出來て出て行く、跡に殘つた一休「哲梅、巴龍、默齋、サア〳〵皆な茲へ來た〳〵、お前達に菓子をやる」「へエ、夫はお師匠様が大事にして置いたお菓子で、默つて食べては惡いだらう」「ナーニ構ふものか、私がお前達にやる、安心をしてお食べ、お師匠様が叱言をいつたら私が引受ければ夫で宜い、早くお食り」「夫ぢ

やア御馳走にならう」と大勢の子供でムシャ〳〵大切にして置いた菓子を殘らず食べて了つた、スルト一休何思うたか師匠の机の上にあつた硯を持出して、庭の沓脱の石へポカリ叩き付けたから堪りません、二ッに割れて了ふ、澄した顔をして居る處へ養叟がお歸んなすつて養一休やに「ハイ茶を持てお出で」「ハイ」お茶碗を持つて來たから顔を見ると涙含んで居る、實はお茶を内々目の縁へ塗つて來たのだ、さうとは知らないから養叟が何をお前泣いて居る、どうした、又喧嘩でもしたか「イエさうではございません、飛んでもない疎忽をいたしました、お師



匠さんに申譯のない事をいたしました養どういたした「イエお師匠さんがお留守の中にお机の上に載せてありました硯、餘り汚なうございますから、綺麗に洗つて置いたらお師匠さんに賞められやうと存じ、椽側へ持出して掃除をして居りました處、手が辷つて石の上に取落してお硯が二ッに割れました、お師匠さんに申譯ない事になりますから、どうしやうと考がへて、那のお師匠さんが藏つて置ましたお菓子、那れを食べると子供は死ぬと仰しやつたから、申譯のいたし方がございませんゆへ、お菓子を食べて死なふといふので、有ッたけのお菓子を皆

な食べて了ひましたがまだ死にません、誠に申譯のないことをいたしました」と頻りに眼を擦つて居る樣子、養叟も呆れた、此奴どうも始末に往かん奴、扨は菓子を食つて、夫が爲めに硯を毀した、迂濶なことはいへない、硯だけ餘計な散財をした養「ア、さうか、よし〳〵硯一ッ位ねで決して死ぬなどゝいふ心得違をしてはなりませんぞ」と其日は夫で濟ませたが、跡で段々樣子を聞くと、菓子を出して皆なに食はせ、自分も喰て、夫から硯を打毀して養叟の歸りを待つて居たといふ事を聞いて、イヤ迂濶な事は一休に言へないと驚ろいてお在なさる。



## 第九席　底拔杓子

スルと或一日の事で○「エ、お賴み申します、坊「ハイ○「エ、差置きで宜しいさうで、手紙を持つて參りました、どうか禪師樣へお上げなすつて下さい、」と手紙を一本投り込んで行つて了つた、哲梅といふ子供が哲「お師匠さん、何處の人だが手紙を置て參りました、養「ア、さうか、出さつしやい」と取上げて見ると、明日先祖の法事をしたいから、どうか一休樣をお供に連れて、正九ッ時までにお入來を願ひたい、所は濁らぬ水の朽らぬ橋通り上る底拔

杓子の子の左衛門といふ、何だかサッパリ分らない事が書いてある養コレ〳〵一休二「ハイ養此んな手紙が來た、先祖の法事をするからお前を連れて來て呉れろ、所は濁らぬ水の朽らぬ橋通り上る底拔杓子の子の左衛門とあるが何處だらうな、一「ヘエ分りました養ハアお前に分つたか一「分りました、之はお師匠さん堀川の石橋通り上る、江川孫左衛門でございます、養ウム、何でさう考がへた一「濁らぬ水といふのは堀川で、朽らぬ橋だから石橋に違いございません、底拔杓子で、柄とかはばかりでございますから、江川、子の子でございますから孫左衛門に違



いございません養成程、是はお前旨い處へ氣が付いた、イヤ大丈夫に違ひあるまい、明日は一緒に行つしやい、一「畏こまりました翌日になると一休を連れて養曳が江川孫左衛門方へ來ると、紅屋仁平、織屋竹齋、錢屋久兵衛、江川屋孫左衛門など申しまするのは、其頃都でも有名な町人でございます、孫左衛門といふ人は有福に暮して居りますから、住居も手廣でございます、家の周圍に濠があつて橋が架つて居る、スルと其の橋の處に立札がある『此のはし渡るべからず』と書いてございます、養曳立留つて養コレ〳〵一休、他へ廻らなければならん、此ん

な事が書いてある　一「ナニお師匠さん構はないからサッサとお渡りなさい　養「でも此のはし渡るべからずとしてある　一「ナニ仔細ございません、眞中をお出でなさい、傍へ寄つちやア往けません　養「さうか」養叟禪師橋をお出でになる、一休も跡から來た、孫左衛門其處へ出迎ひ　孫「是は〳〵能うこそ御尊來下さいまして有難い仕合せ、時に一休さん　一「ハイ　孫「お前さん橋の前に立札があつたが見なさらんかへ　一「大きな眼が二ッあるからチャンと見えます　孫「御覽かへ　一「見たどころではない、一番先に見た　孫「見たら何故橋を渡つて來なすつた　一「イヤ那れは孫左衛門お前が分らな



い、假名で此のはし渡るべからずと書いてあるから、はしを渡らないで眞中を通つて來た、何故ア、書くなら木扁に喬といふ字を書かない　孫「成程、是は恐れ入つた」と一言の下に參つた、此奴どうも始末に往かん、何か一ッ困らして呉れやうと　孫「サアどうぞ此方へ」茲で一通り法事の式が濟み、膳部を此處へ押並べました　孫「どうか禪師お上り下さい　養「イヤ千萬忝じけない」養叟一休の二人は膳に付く、時に孫左衛門が　孫「モシ〳〵一休さん　一「ハイ　孫「どうか其の蓋を取らずにお上んなすつて下さい　一「ア、左樣かへ、承知した、時に孫左衛門お前の家の子供は幾才に

なつたの孫「今年七才でございます」「アヽさうか、男か女か……アヽさう〳〵女だつたな、お前の家のお婆さんは幾才だ」いろ〳〵なことをいつて居る、孫左衛門迂濶話しをして居ると「アッ是は往かん、スッカリお汁が冷めて終つた、どうか孫左衛門盛返て貰いたい」孫「ヘエ宜しうございます」「オット待つて呉れ、夫も只では往けない、蓋を取らずに盛返へて呉れ」孫「ヘエ、けれども一休さん蓋があつちやア盛返られません」「盛返られないものが食べられるか」孫「イヤ又參つた、どうも一休さん貴郎には閉口した、どうか今までの事はお取消しなすつてどうぞ澤山召上つて下さい」其日は養叟とお歸りになる。

## 第十席　御布施帳

織屋竹齋、紅屋仁平、錢屋久兵衛なんぞが集まつて竹「どうでげすえ一休さんは仁「實に驚ろきましたよ」竹「何か困らせるやうな工風はありますまいかね」仁「左樣さ」と何れも世帶の苦勞はなし。所在のない連中だから詰らない相談を始めた、ちやア斯う〳〵いふ事にして一ッ困らしてやりませうと相談が定つて或一日打揃つて眞珠庵へ來て竹「ハイ今日は」「イヤ大分お揃ひだが、生憎お師匠さんはお留

守だ、何か御用かへ　竹「イヱ別に用といふほどでもございませんが、一寸禪師様に伺がいたいことがあつて出ましたが、お留守なら一休さんお前さんにお尋ね申すが」「何だへ　竹「私共が聞く事がお答へが出來ますか」「ア、夫は大概出來ない事はないが、人の知つて居る事は私は知つて居るよ、何を聞くのだへ　竹「他の事ではございませんが、人間は死ぬと何になりますか、一ッ夫を伺がひたい、」いふと、大概な者なら極樂へ行くとか成佛するとかいふのだが、一休はニッコリ笑つて「何だ、そんな事を聞きに來なすつたか、夫はお前人間にもいろ〳〵あるから斯う



と定つて居ない、いろ〳〵な物になるな　竹「ヘエいろ〳〵な者になるでは私共には分りませんが、どういふ者に……」「夫ではお前達に分りの宜いやうに物を見せてやる、一寸お待ち」台所へ行つたが帳面を一冊持つて出て來て「是を御覽　竹「ヘエ、何でございます」「納所帳といつてな、いろ〳〵控えてある、此間何だて三條の寺町通り、河内屋金兵衛といふものゝ親父が死んだ時にな、お布施が一貫五百白米が五升、乾瓢が一袋鳥の子餅が一重、推茸が一袋、何と織屋や紅屋宜い物になつたらう、夫から是はな此間四條の御幸町通りの山城屋源兵衛の阿母が死

んだ竹へエー、其時にはな、白米が一俵お布施が三貫乾瓢が一袋是は餘程宜い物になつた、どうだ人間といふものは死ぬと此んなになつて了ふ、皆なお寺が儲かる、分つたかな」之を聞いて一同手を拍つて感心した　一同成程どうも能く分りました、實に一休樣貴郎には恐れ入つた」と舌を卷いて驚ろいた。

## 第十一席　狸退治

茲に竹村といふ處に一軒の荒寺がございます、住持が出來ると死に又住持が出來ると死ぬ、終いにはモウ此寺へ



直人がない、夫が爲めに立朽れ同樣になつて居ります、といふのは此處に年經る狸が居て、此の狸が住持になつた者と問答が何かして、やり込められて夫が爲めに病を起して死ぬ、どうも住持が茲へ直つて三日とは持たない、さうかといつて此の寺を取潰して了ふ譯にも往かない、ソコでどうにかして其狸を追拂つて此の堂の普請をしたい、大德寺の華叟禪師いろ〳〵話しをする、隱居の養叟禪師が、何にしろ困つたものだ、捨て置く譯に往かないから、是は何とかして、宜い工風をと相談をして居るのをチヨロりと一休が聞いて「エ、狸を追拂ふなら何でも

ございません、私にお任せなすつて下さい、早速退治をして來ます」華「お前に出來るかへ」「エ、萬物の長たる人間で、狸を退治る位ゐ譯はございません、私が今晩參つて妖怪を退散いたさせます、」事もなげに申上げる、兩僧考がへたのは、此の一休は只の人ではない、貴とひ御方のお胤、成程狸や狐は御威光に恐れて忽ち退散をいたすかも知れないといふ考がへもございますから華「夫ではお前御苦勞だが古寺へ行つて妖怪を追拂つてお呉れ、私達も跡から行くから」「ナニお師匠さんがお出でがなくつても大丈夫で、私一人で追拂つて御覽に入れます、」其晩になる



と平氣な顏をしてスタコラ〳〵出掛ける、夫でも間違ひがあつてはならんと思ふから、養叟華叟の兩僧は見え隱れに跡に尾いて參ります、此方は一休樣、來つて見ると何日にも人が住はないから、草蓬々と生え、樹木森々と生ひ茂り晝猶暗く、況して寂寞として淋しさいはん方はございません、門を入つて短冊石を踏んで、本堂へと進み、軒端傾むき壁の土は剝れて梠を現はし、其邊は蜘蛛の巣だらけ、疊は半ば朽て居る、其處へミシ〳〵と棧を踏んで本堂へ上つて廣々とした眞中へ座つて四邊の樣子を窺がつて居ると別に何ともない、何だ詰らない、化物

が出なくつちやあ來た甲斐がないと眼を閉ぢ、澄した顔をして居ると、何處ともなくガラ〳〵ッといふ音がする扨はとパッチリ眼を開いて見ると、這は开も如何に本堂の正面の處から現はれましたのは大聖釋迦牟尼如來、其の左右には文珠普賢觀音勢至五百羅漢、イヤどうも多くの御佛坊さんがズラリと居流れた、大體の者なればキャッといつて眼を眩すのだが、流石は一休平氣なもので、

一「アハ、、出たな、お釋迦樣がお出でなさる、文珠菩薩普賢菩薩、觀音薩薩、是は〳〵大層皆さんお詰め掛けで」一人の大坊主がッカ〳〵と進んで「アイヤ之は大德



寺の眞珠庵の一休、今晩此の處へ問答に參つたものと見える、貴僧を對手に問答に打負けた時には、速やかに當所を退散いたす、又問答に打勝つたなれば此所は我々の眷族長く住居をする、以來當寺へ來るは無用一「よしよし、速やかに問答をいたす、併し貴樣の方から尋ねるか乃公から尋ねやうかウム然らば受答ひをしろ、釋尊一代の經其數如何に」とお尋ねになと、彼の大坊主坊「されば八幡法藏十二部經である、一「如何にも汝の申す通り誠に尊とき御佛の敎、其御經文の中に法と云ふ文字は數幾つあるか、速かに答をいたせ」とヂリ〳〵ッと取詰

めると、アッと云つて忽ち該の和尚ドウと其所へ倒れる。と見えたが、居流れたる釋尊を初め文珠普賢藥王藥上五百羅漢一時にパッと姿が消えて仕舞つた、一休御小僧之を見ると大口開いてカラ〳〵と打笑ひ、「イヤ到頭乃公の問答に負けた、馬鹿者め、何處かへ退散をして仕舞つたと見える、先づ是で宜い、一寢入やらかさう」とゴロリ横になつて、臂を枕にグーグーッと寢て仕舞つた、此方は養叟華叟の兩僧は、間違ひがあつてはならんと、見え隱れに尾いて遠くから樣子を見て居りましたが、別に變つたこともない樣子、どうしたかしらと、寺男を五六人



連れ[illegible]へ入つて、本堂へ來て見ると臂を枕に大鼾、本堂の前に見[illegible]ると、何[illegible]金坊勞を經ましたか更に分らない大狸が血を吐いて死んで居る、其一休の大膽に舌を巻いて驚いた兩僧、段々たづねると是々と云ふ話、年經る狸や狐は此方の腹にあることは直ぐ覺つて返事をするどんな難かしいことを尋ねても此方の覺えて居ることは先方で答えるから、ソコで知らない事を尋ねると先方で返事が出來ない、其所へ氣が付いて御經文の中に法と云ふ文字が幾つあると尋ねた、それが爲めに畜生ハッと行詰つて到頭血を吐いて死んだ、是は今以て狸塚と云つて

古跡を殘しまして、其後此の寺を修覆をして大德寺の末寺として只今以て歴然として繁昌いたして居ります、此の一件で益々一休の評判が高く相成りました。

## 第十二席　みなぬか

兎角いたしまする内に一休御年十九歳に相成りました時に、養叟禪師御逝去に相成る、尤も無双の名僧、七八日前から、モウ此度は迚も立たんと云ふことを御存じで、末寺、又其末の寺々を悉く呼集めまして、後々のことを細やかに御遺言になり、ソコでスッカリ身體を清めて、



今日私は遷化をすると云ふことを未前に知つて衣服を改め、三衣を身に纏ひ念珠を爪繰つて椅子へかゝり、周圍を取巻きました多くの御弟子、皆一同に御經を讀誦に及びまする、一休此時紫の法衣、法子を携へ養叟の傍らへ來て控えて居りまする、一同の御弟子達が御經を讀了りました時に養叟禪師パッチリ眼を開いて、養「コリヤ、宗純は居るか、宗純は居るか、」「之に宗純は控えて居りまする、養「左樣か、私はモウ行くぞよ」と仰せの時に一休が、「何れへ」と大音に呼はつた、養叟禪師雛枯れた顔を上げて、養「極樂へ、」「何しに」と尋ねるから御第子が

驚いた、今息を引取らうといふ師匠さんに一休さまがどういふ考がへか問答を仕掛けるやうな鹽梅、此な處で師匠さんへ論を仕掛けるのは困つた人だと皆一同手に汗を握つて居ると、養叟禪師が「さまで用事はなけれども」といふと一休様が大口開いてカラ〳〵と打笑つて、「阿彌陀を助けに行かつしやるか」と仰しやつた時に養叟禪師遂に眼を閉ぢて大往生を遂げました、ソコで一同のお弟子再び御經讀誦をして、大德寺の境内式の如く埋葬をいたし、養叟禪師の遺言でございますから一休様が眞珠庵を預かることになり、巴龍、周庵、默齋、哲梅といふ弟



子達も皆成長をいたしましたるから、夫々彼方此方一寺の住職にいたします、扨初七日二夕七日と經ましたが、更に佛事供養といふ事がない、織屋竹齋、紅屋仁平、錢屋久兵衛、江川屋孫左衛門などいふものが打寄つて、一同「さて一休様、モヴコレ養叟禪師様がお逝去になつて二夕七日でございます、少も貴僧は御法事をなさるやうな様子が見えませんが、那の儘で捨てゝは置けますまい、といつて、中々一方ならぬ物要り、貴僧にもお困りで在つしやらうから、私共が打寄つていたしたふ存じます、一「併し師匠様の法事を俗人のお前達にして貰ふのは誠に

心苦しい、且氣の毒だ、是は私がする、決してお前方心配には及ばん、三七日の法事をするから、其時にお前方は眞珠庵へ來てお呉れ、膳を上げるから、尤ともお前達から錢を三文貰はふといふのではない、私が師匠さんへ報恩の爲めにするから、一同「左樣でございますか、夫は御奇特なことで、萬事貴僧へお願ひ申します」間もなく三七日の當日になり、ソコで一同大德寺の本堂へ集まる、聽て一休禪師養叟の三七日の法養を濟せまして、一同「扨皆さん、能く今日は參詣をして下すつた、眞珠庵へ行つてどうか膳へ付いて下さい、百五十人前の支度を申付けて



置いた、サア〳〵どうか遠慮なく眞珠庵へお出で、一同「有難う存じます」と、茲で一同の信徒がゾロ〳〵眞珠庵へ參りまして、ズラリと並ぶ、處へ膳が出ました、どうも流石は年は往かんが一休樣は行屆いた人、百五十人前、中々之は安い金じやアない、併し我々が只之を頂だくといふ譯にも往かないから、一同で何か納めなければならんと話しをしながらお蓋を取つて見ると、這は开も如何に糠が一ぱい入いて居る、向ふ付けから御椀でも蓋を取ると皆な糠ばかり、アッといつて驚ろいた、一同「何だへ之は、人を馬鹿にしたお方があつたものだ、此んなものの

出したつて喰るものぢやヤない、馬鹿〳〵しい事をしなさる、一休様は人を何だと思つて在つしやる」と呆れ返つて一同席を蹴立つて立戻る、之れを見て竹齋孫左衛門仁平久兵衛などが、竹「夫だから一休さんいはない事ぢやアない、中々の物要りだからお前さんには荷が重いから私達が物要りは出さうといふのを、お前さんが一人で引受けると仰しやつたが、何でございます此の有様は、糠ばかり盛て付けるなどゝは、餘まり人を馬鹿になすつた致方、本氣でなすつたのではありますまい」とムキになつて尋ねると一休がカラ〳〵と笑つて、「いや夫はなお



前方には分らん、今日はお師匠さんの三七日の當日だ、此膳は何の椀にも皆な糠が盛つてある、之をみなぬかと いふのだ、分つたかへ、竹「冗談いつちやア往けません、なんぼお師匠様の三七日だつて、膳の上に糠ばつかり盛つてみないかなどとそんなこじ付けなことをいつちやア往けません、」「いやお前方はさういふが、決して差支へはない、能く聞かつしやい、俗人は知らず出家といふものはお經を讀むのが勤めだ、處が近い頃の坊さんは誠に風儀が惡くなつて往かん、お布施の多少に依つて經の讀み方が違ふ、夫では坊主の道に外れる、又今日は何年目

の年回だとか、イヤ何に當るとか思ひ出すやうでは往けない、忘れさへしなければ宜い、私は師の事を片時も忘れるといふ事はない、だから別に思ひ出しもしない、お前達が強て法事をしろ〳〵といふから、丁度今日は三七日であるから、皆な糠を盛た、夫か分つたら歸らつしやい、竹「成程、イヤ一々御尤とも千萬、さう仰しやれば夫に違ひございません」とソコで打解けまして一同は立歸りました。

## 第十三席　地獄極樂



前回も伺ひましたが一休禪師の御幼年に就ては種々御話もございますか、大略致して御成人の後諸國漫遊を遊ばされた御話を申上げることにいたします、扨養叟禪師遷化をなされて後一度大德寺の長老となつて御年五十を越えまして、眞珠庵に御隱居をなされ、先代の養叟禪師のやうに矢張御手許に子供ばかり御差置きになり、哲梅巴龍周庵などゝ云ふ名を附けて御寵愛に相成りまする、益々一休禪師の御名は海内に響き渡つて其大德を慕はざる者はない位ゐ、或る一日お小僧を連れて東福寺へ參つた歸路、四辻へお掛りになると向ふから一人の侍が馬へ打

乘りまして、ハイヨーと乘立つて來た、一休禪師道の傍らに佇んで避けて居つしやる、此樣子を見て馬足を留めまして、彼の侍馬上に默禮をいたしまする、禪師之れを御覽になつて、「御武家、何れへお出でになる」彼の侍左手に手綱を取つて右手に扇を開いて、侍「是へ參ります禪師カラ〳〵とお笑ひなすつて、「ハヽア宛字を書かしッたな、侍「御免」と云ふと彼の侍其儘馬を飛ばして行つて仕舞つた、お弟子が此の樣子を見まして、哲「お師匠さん只今の侍は何處へ參られました、「彼れは鳥羽へ行つたのだ、哲「ヘエーお師匠さんが宛字を書かしつたなと仰しや



いましたが、彼れは何て、「されば、戸冠に羽と云ふ字を書くと扇と云ふ字、デとばと讀ませる、眞のとばは鳥に羽を書いて鳥羽と云ふ、所を扇を見せて是へ參ると云ふから宛字ぢや、哲「ヘエ成程左樣でございますか」と言つて其日はお歸りになつた、二三日經つと眞珠庵の玄關へ、侍「頼む、默「ドーレ」默齋と云ふお小僧が出て來た、默「誰方樣で」見ると立派な侍、默「エー貴賓は、侍「乃公は人間だ、默「ヘエ、何れの御方で在つしやいますか、侍「身共はお前と同國の者だ」默齋驚いて仕舞つた、默「何方から入つしやいました、「彼方から來た」サア默齋驚いて、

狂人に違ひない、　默「暫らくお控え下さい……お師匠さん、大變な侍が參りました、」「どうして、　默「立派な姿をして居りますが氣が違つて居ります、貴方は誰方でございますと伺つたら人間だと答へました、何方の御方でございますと言つたら、お前と同國の者だ、何方からお出でになつた、彼方から來た、あんな者を通しても致し方ございませんから歸しませうか、」「ウム、イヤ斯う言つて聞け、貴處は父上や母上がありますか、あると言つたら貴處のお名は何と仰しやるか、それを聞いて、貴處のお國に變つた何か名物があるか、それを聞いて參れ、　默「ヘエ」



默齋玄關へ出て來て、　默「エーチョット御尋ね申します、貴處はお父上や母上がお在でございますか、　侍「ア、兩親はあるよ、　默「ハヽア、貴處の御名は失禮ながら何と仰しやいますな、　侍「私は天地乾坤とも、地水火風とも申す、　默「ヘエー、失禮ながら貴處の御國に何か變つた名物がございますか、　侍「さうさ、別に名物はない、烏はカア〳〵と啼き雀はチウ〳〵と啼くだけのことだがな」彌々此奴、狂人に違ひないと默齋奥へ飛込んで來て、　默「お師匠樣、尋ねましたら是々申します」一休禪師ハタと手を打つて「ア、來たな蜷川が、　默「お師匠さん分りましたか、　「分

つた、當時都に於て有名の學者、奉行蜷川新左衛門に違ひない、新左衛門にお通りなさいと申せ、「へエ」默齋玄關へ出て來て、「蜷川様此方へお通り下さるやう、」「ハ、アお分りになつたかな、然らば御免」と一刀を提げまして、默齋に付いて奥へ入つて來た、「是は禪師には御機嫌克ろしう、」「イヤ是は新左、サア〳〵苦しうない、此方へお出で、」「先日は宛字を御覽に入れ、どうも面目次第もございません、」「何と新左、中々其方はやり居るワイ、今日は幸ひ用もないから、緩りと遊んで行くが宜い、」「有難き仕合せ、少々お尋ね申したいことがあつて



出ましてござる、」「何だな、」「人間僅五十年と申しますのは何を以て定めましたか、」「イヤ新左、私は其理屈といふことは嫌ひぢや、アア〳〵左様なことは止せ〳〵、」「仰せではございますが「面影のかわらで年の積れかしたとへ命に限りありとも」、如何でございます、」「ウム、私はさうは言はん、「面影の變らば變れ年も老れ無病息才死なばこつとり」と云ふ、どうだ、」「ハ、ア成程恐入りましてございます、扨禪師、地獄極樂と云ふは何方にあつたか、」「是は難かしいことを聞くな、地獄極樂か、それは此處だ」と傍へにあつた如意を取つた一休禪師、新

左衛門の肩先を發止と不意にお打なすつたから、ハッと驚いた新左衛門、「是は無法でお在なさる、縱令尊い御方なればと云つて、漫りに人を打擲なさると云ふは其意を得ぬ」と傍へにあつた一刀を膝頭に引寄せ、柄へ手が掛つて鯉口をプッリと切つた、禪師御笑ひなすつて、「新左衛門、其所が地獄だ、お前の肩を打つ、腹を立つて私を切らうとする、私を切つたらお前も其の分では居られまい、其所が地獄だ、」「成程、イヤ是は大きに恐入りました」と刀を傍らに差置いた、「ソレ其處が新左極樂ぢや、人を切れば己れも死なねばならん、其所をヂッ



と耐え忍ぶから、お前も無事私も無事、人間生涯無事に今日を送る、其所を極樂と云ふ、地獄極樂は其所だ分つたか、」「相分りました、實にどうも禪師恐入りました、時に禪師に伺いますが、當時念佛宗南無阿彌陀佛と云ふ六字を唱え、又日蓮宗では南無妙法蓮華經、或は妙法蓮華經、七字五字の題目を唱えます、處が近頃の坊主は誠に心得違ひ、南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經と眞面目に誦みません、南無阿彌、南無阿彌、或は南無妙〳〵などと申して、五字七字六字をズッと唱えません、どうも以ての外の心得違ひのやう承知いたしますが、是は禪師ど

う云ふもので、一「成程どうも新左、えらい所へお前氣が付いたな、さうか、併し新左お前は豪い、」新「へエ、」「感心だな新左、」新「ハイ、」「イヤ不思議だ新左、イヤお前はどうも豪い者だな新左」無暗に新左〳〵と續けて呼付ける から新左衛門弱つて仕舞つた、「時に新左衛門、お前は蜷川新左衛門親當と申すな、」新「左様でございます、」「普通に言へば蜷川新左衛門親當と呼ぶべき所を新左と呼んでお前は返事をする、」新「左様、」「其所ぢや、語が通ずれば宜い、新左衛門親當と呼ぶべきを新左と言つてお前がハイと言つて返事をする、されば南無阿彌陀佛と唱える



を南無阿彌、南無妙法蓮華經と云ふを南無妙、言葉は足らんでも心が通ればそれで宜いから、何も經を長く誦んでも心に留めんければ往かん、其故先づ口よりは心が大事だ、」新「成程どうも恐入りましてございますが、併し禪師是ばつかりは御答が出來ますまい」と袂から紙に包んだものを出した、「何だい、」新「雀でございます、」「アヽ結構な物を持つて來た、生きて居るんだな、何かい新左衛門、雀燒にでもして私に馳走をする考へで持つて來たのか、」新「イヤ左様ではございません、御覽下さい」左の手の掌へ右の雀の子を載せて、新「今日此方へ參りまする

前、出掛に軒の瓦の間に巣を造つて居りました小雀を一羽私が捉へて持つて參りました、此手の掌へ載せた雀、私が逃がすと思召すか握り殺すと思召すか、どうか御挨拶を伺ひたい、一「成程、イヤこいつ新左衞門、むづかしい話だ、マア〳〵待て〳〵」ズイとお立ちなすつてズカ〳〵とお出でなさる、椽側へ障子を一枚開いて片足椽側へ踏出して、一「新左衞門、私が今片足椽へ出した、此の足を座敷へ入れると思はつしやるか、又は椽側へ出て仕舞ふと思はつしやるか、どうだい新左衞門、新「ヘエ」一「私が雀を放すと言つたらお前は握り殺す、握り潰すと云つ



たら放して仕舞ふ、それと同じことで、私の足も出るか入るかお前には分るまい、新「どうも恐入りました、迚も私の及ぶ所でございません、聞きしに勝つた實に禪師は天下の大德、今改めて私を御弟子になすつて頂きたい、一「それは往かん、新「ヘエ、一「往かんよ、新「ナゼ往けませんん、一「お前は一度奉行を勤めたらう、新「左樣、一「役目とは言ひながら罪人を死刑に處したことがあらう、新「左樣一「それだから往かん、お前の爲に調べられて處刑になつた者の思ひがお前に掛つて居るから、佛門に入る譯に往かん、新「是は禪師の御言葉とも承知いたしません、掟と

申すものは天下將軍の拵へましたもの、私しは取次人でございます、されば怨めば將軍家を怨む可でござる、何も手前を怨む所は決してございません、「成程、イヤ大きに其邊もある、ウムさうか、マア〳〵新左衞門茶を一服呑まつしやい、」新「有難う存じます、」「時に新左衞門一昨日の彼の雪でな、」新「ヘエ、」「庭の竹に大層雪が積つて居る、雪の爲に竹の枝が折れると可哀想だ、誠に御苦勞だが一つ竹の枝に積つて居る雪を拂つてお呉れ、」新「ヘエ」酷い坊さんがあつたものだ、乃公を下男同樣に心得て居さつしやるかと思つたが仕方がない、新左衞門庭下駄を



履いて立出で、長い竿を持つて來て竹に積つた雪を拂つて居る、椽側へ佇んだ一休禪師、「コレ〳〵新左衞門、それでは往かん、竿で拂つたのでは誤つて枝を折ると往かんから、側へ寄つて竹の眞中を握つて二つ三つ振るとスツカリ雪は落ちて仕舞ふ、さう致して呉れ、」新「ハイ」仕方がないから新左衞門竿を傍らへ差置いて、ズツと竹の側へ來て、中央の所を掴んでガサ〳〵と二つ三つ振つた、竹の枝へ積つた雪は落ちたが其の雪が新左衞門の襟元へ入つたから冷たいの冷たくないの、「何と新左衞門道理と云ふものは其所にある、今お前が笹を振つて葉に

積つた雪が皆なお前の身體に掛つたらう、新「ヘエ、」「ホラ、其所だ、竹の雪を拂へと吩咐たのは私だ、私だが私の身體へは雪は少しも掛らない、吩咐つたお前に雪が皆かゝる、されば吩咐けた將軍には怨みは掛らんが、却つてお前に怨みが掛る、道理と云ふものは其所だ、分つたかな、新「如何さま相分りましてございます、就ては禪師是非どうか御弟子に願いたうございます、」「弟子にして上げても宜いが、併し私の弟子になるには人遍を取つて來なければ弟子には出來んて、新「人遍を取りますか」「さうだ、分らんければ家へ歸つて考へて來さつしやい、



新「左樣、然らば今日は御暇をいたします」我屋敷へ歸つて腕拱いて考へて居ると、細君が辰子殿と云ふ、辰「良人何を毎日そんなにお考へなさる、新「默つて居さつしやい、少し考へることがある、ハテナ人遍を取つて來い、何だしらん」稍暫らくの間新左衛門考へて居たが、三日目に漸々考へ付いた、新「ア、成程さうか、おたつや、私は今日限り隱居をする、家督は忰新右衛門に讓つて、私はモウ世の中を捨るから、辰「何故貴所は急にそんな事を仰しやいます、新「イヤ眞珠庵の一休禪師に御弟子になされて下さいと申上げたら、人遍を取つて來いと仰しやる、ど

うも分らんから伺がうと、宅へ歸つて考へろと仰しやる今日で三日乃公は考へて漸々分つた、さむらいと云ふ字は人遍に寺と云ふ字を書いて侍だ、されば人遍を取つて仕舞へば跡は寺と云ふ一字が殘る、だから私に人遍を取つて來いと仰しやつた、侍を止めろと云ふ謎だ、私は今日から佛門に入つて一休禪師の弟子となり、世の中を離れるから、辰「それは試に結構な思召し、左樣ならお留め申しはいたしません、新「そんなればと直ぐ御子息の新右衞門を呼んで、新「扨家督はお前に讓る、私は今日から隱居の身分、新右「是はしたり父上若年の私、中々家督を御讓りに相成つても、手前には、新「イヤ〳〵さうでない、何を言つてもモウ乃公は了簡が極つたから、彼是言はしやるな、世の中はスッカリお前に讓つて仕舞つたから」といつて上に此段を届け、怜新右衞門に家督相續、自分は隱居の身分となり、七日目に至つて眞珠庵へ參り、新「扨禪師今日は人遍を取つて參りました、家督は怜新右衞門に讓つて隱居に相成りました、どうかお弟子に願いたい



「ア、さうか、それはどうも新左衞門豪いことをした、それでこそ人遍が取れた、早速私が弟子にして進せよう新「就ましては禪師、今日頭を圓めませう、「イヤ〳〵それ

には及ばん。矢張お前は頭を圓めん方が宜い、其儘毛を置かつしやい、心が佛門に入ればそれで宜い「悟りなば頭を剃るな魚食へ地獄へ行つて鬼に負けるな」どうだ新左衞門、新「へエー成程、一「私は坊主が稼業、是が看板だから頭を圓くして置かんければ稼業にちと都合が惡い、お前は何も私とは違うから、態々頭を圓めるにも及ばん、矢張其儘生やして置かつしやい、新「左樣でございますか、然らば手前は此儘に」と是から新左衞門は始終禪師のお手許へ來て敎えを受けまするのを何より樂しみにいたして居る、此の新左衞門は當時都に於て名高い學者でございますから、一休禪師も又となく新左衞門をお愛しになり、何處へお出でになるにも新左衞門が必らずお供をする。



## 第十四席　氣儘の六藏

或る一日のことで、蜷川新左衞門御供をして他方へお出でになつた、歸路四條の河原へ來ると非人が大勢居りまして下さいまし」とガアヽ怒鳴つて居る、一「コレヽヽ新左衞門、非人共へ錢をやんなさい。」新「ハイ、一「澤山や

んなさるが宜い、新「ハイ」禪師は錢などを持つて在つしやりやアしない、蜷川新左衛門自分の腰下げから錢を出して、新「サア非人共、手の中を取らせる、」○「ハイ〳〵有難う存じます、御蔭樣で助かります、有難う存じます」と非人共はぱッ散かつて錢を貰つて居る、ト中に一人の非人の頭體の者、頭「エー是へお出でになりましたのは大德寺の一休禪師樣ではございませんか、」一「私は一休だ」頭「アヽ左樣でございますか、どうも左樣に御見上げ申しました、私は蓮臺野に居ります氣儘の六藏と申す非人でございますが、彼方へ御通行の時はお立寄りを願ひたう



存じます、」一「アヽ宜い〳〵、近日お前の所へ行かう、六「有難う存じます、是非お待受けをいたします」と言つて別れた、蜷川新左衛門、オヤ〳〵大變な乞食があるものだ、お出で下さいと願う奴も願う奴だが、それでは行かうと御承知をなさる禪師も餘り物に構はな過ぎると驚ろいて居りまするとと、二三日經つと、或る朝、一「今日は何にも用がない、此間約束をした蓮台野の非人の六藏と申す者の方へ參らう、今日は行く所が行く所だ、誰も附いて來ては往かんぞ、決して一人も附いて來るのではない」と只一人瓢然としてお立出でになつた、中に新左衛門一

人は、ハテナ、どんな御話があるかと見え隠れにお供をして參りました、一休禪師はスタ〳〵蓮台野へお出でになりますると一軒の小屋がございます、非人頭氣儘の六藏の家、門口に佇みまして、「コレ〳〵誰か居らんか一休だ」之を聞くと、二三人の乞食が飛んで出でまして、「ヤア大德寺の一休様がござらつした、禪師様がござつた」と早速非人頭の六藏に告げましたから、六「是は〳〵禪師様、能く御出でになりました、サアどうか此方へお通りを願ひます」小屋へ入つて御覽なさると莚が敷いてある、正面に新らしい藁莚を三枚ばかり敷いて、六「サアどうか



禪師様お直り下さい」禪師軈て其の上へドッカリ着座をなすつて見ると、非人の住居でございますから、一つ竈、側に損けた釜が掛つて居る、向ふに素麺箱が鼠不入の代りになつて居る、摺鉢に箍の掛つた火鉢、碌な物は一つとしてございません、蜷川新左衞門此の様子を見て、小屋の後ろへ廻つて禪師の様子を窺つて居ります、ト六藏と云ふものが、六「扨禪師様、穢苦しい所へ能くお出でになりまして有難き仕合せ、粗茶を一服差上げます、」「それはどうも何よりの馳走、早速所望するであらう、」六「左様なれば」とあつて茲で六藏と云ふ非人が茶をたつて上

げた、禪師殊の外お喜こびで、右のお茶をお上り遊ばす、

二つ三つお話しがあつて、六「扨禪師へお願い申上げます、どうか私が死んだ時に引導を願いたう存じます、」「ア、宜し〳〵、何時でも知らして參れば私が來て引導を渡してやる、六「有難う存じます、何分にも願います、扨上人様、別段申上げる御話もございませんが、是は私が口吟みましたので、どうかお笑ひ艸に御覽下さい」と鼻紙に認めて差上げたのを手に取つて御覽になると、

寢る間こそ人にかわらぬ身なれども
明れはかわる曉の鐘



「是は喜こばしい、其方の心入、忘れは置かん、一休は之は有難く承知いたしたぞよ」と大層お喜こびでお歸りになりました、是は何だと云ふと、一休様は後龜山院の御胤、南朝の王子で在せられると云ふことは何人も知つて居ります、されば一休禪師御自身に、乃公ば斯う云ふ尊とい方の子だと御自分が慢じるやうな事があると御爲めにならんから、決して左様な御心をお出し遊ばすな、何處までも大德寺の一休、出家の境涯で昔のお心をお出し遊ばしてはなりませんぞ、誇つてはならんと餘外ながらの御意見、氣儘の六藏と云つた此の非人は元と南朝に

仕へました深尾但馬守と云ふ無双の忠臣、戰場萬場往來をした勇士、時勢の變遷で今は非人となつて氣儘の六藏と言つて暮して居ります、是は禪師も御存じだから六藏の意見を大きにお喜こびになつてお歸りになつた、表へ出る、蜷川新左衞門バッタリ出會した、「コレ新左、附いて參つたか、」新「ハイ、」「來ては往かんと申したのに何故來た併し委細の話を聞いた上は致し方がない、決して是は口外をして呉れるな、氣儘の六藏と云ふ者は彼れは元深尾但馬と云つた南朝の忠義者であつた」新左衞門に口止をなされてお歸りになつた、五六日經ちまするとと非人がや



つて來て、○「お賴う申します、」周「何だ、」○「私は蓮臺野の氣儘の六藏の配下の非人でございます、頭の六藏が亡なりました、どうか禪師樣に御引導を願ひたく出ましてございますが、」周「左樣か、控えて居れ」周庵と云ふお弟子が、乞食が引導を渡して呉れ、大變なことを願ひに來た、禪師樣が御承知をなさるかしら、申上げると禪師が「宜し〳〵、早速行つて引導を渡してやる、コレ〳〵使の者に只今一休が參るから、歸りに龜の子を一疋買うとも捕へるともして、待つて居れ、引導を渡すに龜の子が入用だと能くさう云つてやれ、」周「へい……」使の非人に此事を

言ふ、畏りましたと言つて歸つた、直ぐに禪師はお支度をなすつて蓮臺野へお出でになる、お弟子達は、引導を渡すのに龜の子が入用だ、妙な事を仰しやつた、ハテナどんな引導の渡し方をなさるか一つ行つて見やう、我れも〳〵と跡に尾いて參ります、蜷川新左衞門も同じく跡に付いてやつて來る、蓮台野へ來ると非人共一同、○「ヤア禪師樣がござらッした、有難う存じます、どうか此方へ」「龜の子はどをした、」「へイ〳〵一つ買つて參りました、此處にございます、」「さうか」六藏の枕許へお立寄りになつて、「ハア、、、六藏も遂々佛になつたか、コレコ



レ龜の子の胴中を糸で結いて此處へ持つて參れ、○「ヘエ」軈て龜の子の胴中を糸で括つて禪師へ差上げると、それを取つて氣儘の六藏の頭の所へ龜の子を載せて、グルリ一廻り廻して「いろはにほへと」と高らかに仰しやつた「サア是で宜しい、早々葬つてやれ」非人が呆れて仕舞つた、○「何だ、馬鹿にした坊さんがあつたものだ、何ぼ乞食の引導だつて餘り安直過る、人面白くもねへ、龜の子を頭の頭の上へ廻しているいろはにほへと、此んな引導は聞いたことはねへ、馬鹿にした坊樣でねへか」皆一同ブッ〳〵言つて居る、附いて來たお弟子にも分らない、「何

で此んな引導をお渡しになつたか、どうも合點が往かんと思つて居る、中に蜷川新左衛門一人感心をした、新「成程どうも禪師は恐入いたものだ、實に當代無双の活佛でお在で遊ばす」と感服をした、外のお弟子達が、周「新左衛門樣、貴所一人大層御感心だが、どう云ふ譯けか分りましたか、」新「分つた、」周「分つたらどうかお話を願いたい」新「お前達は知んなさらんか、六藏と云ふ者は元南朝の忠臣深尾但馬守と云つた豪傑、世の變遷で此所へ來て非人頭、世の中を氣儘に暮すと云ふ所から氣儘の六藏、いろはにほへと」と仰しやつたのは是はいろは四十八文字を



七字毎に連ねて見ればとが、ないしてしすとなる、又龜の子を載せたのは、手も出さず頭も出さず尾も出さず六事を治める龜は萬年と云ふ、總て世の中は六の數で出來たものだ、唐土は六町一里、日本は六六三十六町を以て一里とする、一天地六、又死ぬ時は西に參ると申して、二に四を加へるから六になる、人と云ふものは四寸に二寸の穴から出て、四尺に二尺の穴に入る、何處までも六の數は離れぬもの、されば龜の子を以ていろはにほへと、と引導をお渡しになつた、即ち是が禪師の豪い所で在せられる」と新左衛門の話を聞いて一同の弟子達も大きに

感心をいたしました、ソコで非人達が寄り集つて六藏の死骸は其邊へ埋葬をした、扨禪師は其儘に大德寺へお歸りに相成りました。

## 第十五席　松飾り

應永二十年正月元日都の町々は、何れも門松七五三飾、陽々として殊の外賑はひまする、神道でも佛道でも、此の正月の飾りはいたします、七五三の〆といふ、之は天神七代地神五代、所謂天地人三才を象どりましたものだといひ、何れも三ケ日は雜煮を祝ひ、屠蘇都て目出度いもの



で持切つて居ます、丁度此の日一休禪師は竹の先に髑髏を付けて、目出度いなゝといつて都の町中を歩きました、四條室町上るの處に、當時京都一番の書林でございまして、錢屋久兵衛といふ、是は前にも伺がひました通り、一休樣とは別段の御懇意をいたして居ります、此所の門口へお出でになりまして、「ハイ今日は」主人の久兵衛が、元朝でございますから、先づ膳に付き、續いて女房から番僧丁稚、皆な打揃ひまして、屠蘇を祝ひ、之から雜煮を食べやうといふ處へ一休樣が入つてお出でになつた、朝坊主丸儲けとかいふことがございますが、元

日の朝から髑髏を持つて來た、流石に主人の久兵衛は禪道を學んで居るから左のみ驚ろきはいたしませんが、他の人達は忌な物を持込んだと眉に皺を寄せて居る、主人の久兵衛が、久「イヤ之は禪師樣入つしやいまし、誠に靜かな春でお目出度ふ存じます、サアどうぞ此方へ」と座敷へ招じて、久「ヱ、今日は御悠くりとお話しを願ひます、一ぱい献じまする、」「をや夫はどうも忝じけないな、では早速に馳走になりたい」と膳の上を御覽なさると裏白を敷いて鯛の白目鯛と申しまするやつ、是は正月の廿日まで飾つて置いて、廿日に燒いて食ふ、「イヤどうも大



變いろんなものが並んで居るな、何だえ夫は、久「之は山草と申しまする齒朶でございます、」「ナニ死んだ、久「御冗談仰しやつちやア困ります、山草で、」「ハヱ病ひ草、久「病ひ草ではございません、」「裏白もある、白といふものは全體淨いもので棺桶を白布で卷く……、久「どうも貴僧は怪しからんことを仰しやいますな、どうか左樣なことはヱキにして雜煮は如何で、」「雜煮、結構早速頂戴しやう」箸をお取んなさらうとすると、久「ヱー是は太箸と申しまして身上が太うなるやうにといふので用ひます、誠に目出度い箸で、サアお上りを……、」「ハア、何かへ

之は半ばが太くつて跡先が細いやうだが、して見ると身上が後に段々細くなる、久「御冗談仰しやつては往けません、サア汁が冷めますから召上つて……、」「アッ久兵衛歯が抜けた、久「へエー、夢に見てさへ悪いと申しますに元日早々歯が抜けたなんで、餘まり宜いことちやアございませんな……、」「アヽさうではない、餅に四匁三分の銀玉が入つて居た、久「アヽ左様で、夫はその態々搗く時に入れましたので、」「ウム、何でな、久「夫を食ふと金持になる、毎年一つづゝ入れて置きます、誰か食ひ當る者が誠に仕合せが宜いといふので、扨は禪師様がお上りなすつ



た、」「さうか、久「貴僧は當年金持ちになります、」「馬鹿をいへ、餅の中に金なんぞを入れて置くのは往けない、以來は止したが宜いな、久「ヘエー何故で、」「分らん奴だな、もちかねるといつてな、久「どうも碌なことは仰しやらない、」「何だへ其處にあるのは、久「之は白目鯛と申しまして廿日まで斯うやつて置きます、」「見るだけの事か久「左様で、先づ一方の頭になりまするやうと斯様に差置きまして、廿日になつて是れを燒いて家中で骨まで食べます、」「ハア、シテ見ると今の處は曝し者……獄門だな廿日になつて骨上げをする、」「どうも御冗談ばかりで恐

れ入ります、どうか左様なことは眞平で此の通り……

「アハ、、、手を合せたな、夫へ珠數を掛けると丁度亡者のやうだ、」久「呆れて貴僧には物も言へません。今日は他の日と違ひ正月の元日で、どうか夫ばかりは仰しやいませんやう、」「さうか、さう貴樣が氣に掛けるなら祝ひ直してやらう紙と硯を持つて來い、」久「へエ有難う存じます、どうかお目出度いものを願ひます、」「よし〳〵サア墨が摺れたら出しなさい……酒を注いで吳れ」呻と二三杯やつて筆を執ると一枚の白紙へ

正月の儀式は死ぬること始め



爆竹は火葬廿日骨上げ

「どうだ目出度からう」又一枚へ

門松は冥途の旅の一里塚

目出度くもあり目出度くもなし

と書いて、「イヤ我ながら能く出來た、」久「へエ成程」「世の中に死ぬほど目出度いものはない、久兵衞是を御覽」と鼻つ先きへ例の髑髏を突付けたから、イヤ久兵衞驚ろくまいことか、ソコで此の歌は久兵衞が貰つて、久「どうか御悠くりお話しを、」「イヤまだ行く處があるから何れ春長に來る、ハイ左樣なら」と表へ飛出した、處へ通り

掛つたのは蜷川新左衛門、「是は禪師には何れへお越しになります、」「イヤ新左衛門か、お前も大層早く何處へ出掛けた、」「一二軒年頭を濟ませまして、是から禪師の御許へ參りまする考がへ、」「アヽさうか、私も今日は元旦の禮に出た、何と新左衛門、之を見さつしやい、誠に目出度い年の始め」と竹の先の髑髏を突付けた、「之は恐れ入りました」と流石は新左衛門感心をした、感心をしたのは此人だけて、他の者には分らない。

## 第十六席　蓮如問答



丁度今三條通りへ掛て來ると、行列美々しく本供で乘込んで參りましたのは、本願寺の八代目蓮如上人、當時名高い博識の名僧でございます、一休樣が御覽になつて、ハア本願寺の蓮如上人、未だ乃公は蓮如の力を知らない、茲で會たのは幸はい、一ッ試して見やうと乘物の側へツカ〳〵と進んで、「イヤ蓮如さん、私は一休だ、一寸待つて貰いたい」之を聞くと乘物を留め、戸を開いて夫へ立ち出で、對手が一休だから御自身に御挨拶をなさる、「時に蓮如さん、お前さんに少し聞きたいことがある、」蓮「ハア」往來中で問答を仕掛けられてはチト迷惑だとは思

つたが對手が對手だから仕方がない、蓮「何の御用で、」「他でもないが……袈裟法衣有難さうに見ゆれども之もぞくかの他力本願、どうだへ」之を聞くと蓮如上人、少しムッとしたが、蓮「物の名は所に依りてかはるなり浪花の葦も伊勢の濱荻、如何でございます」といつたのは、三界無安樹下石上を宿とする僧と違つて、蓮如上人は女房を持つてお暮しになる、他の坊さんとは大きに違ひます一休様が、「或程、蓮如さん、西方に極樂があり、又一百三十六地獄あるといふが、譯を知らないでは濟むまいが、私も行つたことがない、どうか敎えて貰ひたいものだ、



蓮「左樣でござる、有りといひ有りといふ人には地獄あるものぞ無しと思へば人にこそ依れ、如何でござる、」「イヤ其通りぢや〳〵、聞きしに優つた當時の名僧、實にも天晴れな人だ、時に眞の佛といふは何れにあるか之も序に敎えて貰ひたい、蓮「ハイ」といつたが少しく蓮如上人が答へが詰つた、一休樣がカラ〳〵とお笑ひになつて、「金佛や木佛畫像石佛有難がるも口利かぬゆゑ。釋迦阿彌陀地藏藥師と名はあれど同じ心の佛なりけり、何と蓮如さん、眞の佛は之だと、竹の先に付いた髑髏を上人の前にズイと出した、スルと蓮如上人が、蓮「如何さま、斯

くなれば目出度き最上でござる、眞の極樂」と之を押頂だいた、「イヤ天晴れ天下の名僧恐れ入つた、まだ一二ケ條聞きたい事があるが、今日は之でお別れ申し、近日お尋ね申すでござらう、イヤ大きにお妨げをいたした」と其儘お別れになつた、後に一休蓮如問答といふ名高いお話しがございますが、是は又後して申上げる事にいたします。

## 第十七席　大名弔らひ

一休樣は眞珠庵へお歸りになると其後或一日、立派な武士が參りまして、「武士が參りまして、「お頼ふ申します、手前は丹後宮津の城主桃井若狹之介家來、植村内記と申します、此度主人病死をいたしました砌り、遺言でございまして、本葬の節は京都八宗の名僧を頼み、葬式を營なみ呉れるやうにといふ申付け、且引導は一休禪師に願ひたいといふ生前の願ひ、どうかお出張を願ひ奉つる、又お出での時は御本供に願ひたく、此段をどうか禪師へお取次下されたい」一休禪師へ申上げると、「アハ、、、、本供で來て呉れろ、よし〳〵承知した、けれども其の供の人足一人に就て錢一ッ貫づゝ申受けるが、夫を承知なら行くと申せ」ソ

コで右の由をいふと武士が、武「委細畏こまりました、明五ッ時にどうか御出でを願ひます」といつて歸つた早速禪師様が大徳寺の領地五ケ村の庄屋を呼出しまして、

一「小前の者で貧乏人なれば幾人でも宜い、女子供が交つて居ても差支へないから、明朝早々大徳寺へ參るやう、尤とも參つたものには錢一貫づゝ遣はすから」庄屋が喜こびまして、庄「有難い仕合せ、明朝相違なく召連れ出でまする」茲で五ケ村へ觸れましたから、我も〳〵と翌朝になると三百五十八人集まつた、ソコで一休様が、一「サア〳〵皆な揃つたか、揃つたら桃井の屋敷へ出掛ける、



賃銀は先方で呉れるから、○「畏こまりました、一「途中は何ぞ念佛を唱えて行く、宜いか乃公が音頭を取つてやる、○「へエ〳〵畏こまりました、一「夫から何だ、見た處婦人子供が多くて駕籠を舁ぐやうな者は見えない、けれども中で壯健さうなのが駕籠を交る〴〵担げ、尤とも底拔の駕籠で乃公は中で歩いて行く、○「へエ〳〵畏こまりました、一「サア宜いか、○「宜しうございます」禪師今日は本格でございますから紫の法衣、是は又大したもので、拂子を振つて駕籠と一緒に歩いて居る、三百五十八人が前後を取卷いて出掛けに、一「乃公が音頭を取つたら一同念

佛を唱えろ、ソレ宜いか、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」といふと夫れに連れて三百五十余人が一度に、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……當日は桃井の葬式を見やうといふので都の町では人の山を築いて居る、其處へ本願寺の蓮如、本國寺の妙蓮、妙顯寺の日葉、建仁寺の陀僧、東福寺の傳海なんぞといふ上人達が、何れも本供で綺羅を飾つて乘込んで來る、少し後れて一休の行列、南無阿彌陀佛〳〵とやつて來た、見物は驚いて、○「吉兵事さん何んでげせう、」吉「左樣さ念佛講かも知れませんよ、オヤオヤ子供も居る、」○「何んですえ那の駕籠は、」吉「是は、陽氣



の加減で足が生えましたかな……」そんな奴があるものか、能く〳〵見ると大德寺の一休禪師が駕籠の中で歩いて居るから都の町では驚ろいた、軈て桃井の屋敷へ一同乘込み、一休樣も玄關へお掛りになつたから、桃井の家來大勢夫へ立出でまして出迎ひ、家「是は〳〵、御苦勞に存じます、」「イヤ御家來衆、豫てのお約束だ、今日は供方一同へ一貫づゝやつて下さい、家「委細心得ました、何れ後から……、」「イヤ夫は往かん、現金にやつて下さい、家「ヘエ、お供方は何人ばかり、」「さうさ、何人といつて細かう調べはいたさんが、三四百人は居るだらうな

家「へエ、」「私の供は何だ、御主人桃井若狭之介殿菩提の爲め、茲まで念佛を唱えながら參つた、誠に殊勝なものである、どうか夫々やつて貰いたい、」家「畏こまりました……エ、一休樣のお供の衆、賃銀を出すに依つて皆な之れへ來さつしやい、」○「へエ有難う存じます……オイ錢を下さるとよ、皆な寄つた〳〵」といふとゾロ〳〵やつて來た、中には子供や女が居る、家「コレ〳〵お前は何だ、」小「私は一休樣の御供で、」家「ナニお供だ……さうか、其所へ來たのは何だ、」女「私も同樣で、」家「ア、一休樣のお供か……サア一貫づゝやるから持つて行け、」貰つたものは



左りへ出て、貰はない者は右へ來い、△「へエ畏こまりました……、」家「コレ〳〵其方は今貰つたではないか、」△「イエ頂だきません、」家「嘘をいへ、」△「本當で、」家「能く似て居るぞ、」△「那れは兄貴で……」兄貴もないものだ、狡猾奴は二度貰い、或いは三度貰いをする、面白半分に尾いて來た彌治馬連が之を見て、甲「オヤ是は旨いぞ、乃公も貰つてやれ、エ、手前にも、」家「何だ貴樣は、」甲「一休樣のお供で、」家「嘘をいへ、」甲「全たくで途中からお供をして參りました、」家「途中から參つたのでは遣はさん、」甲「へエー往けませんか、」家「駄目だ、」甲「でも念佛を唱えました、圖太し

い奴があるもので、桃井の家來も呆れた、山のやうに積んで置いた錢がスッカリ無なつて算へて見ると六百三十一人あつた、ソコで禪師に於ては供を歸して座敷へ通り一同の上人達へ御挨拶が濟み、イザ引導といふ時に一休樣が、一「コレ〳〵若狹之介伜愛之助は如何いたした、家「今日は種々多用でございまして、那方に居ります、一「此處へ一寸呼んで來なさい、私が愛之助の居る處で引導を渡すから、家「有難い仕合せ」早速に桃井若狹之介の伜愛之助、無紋の上下、五六人の老臣を連れて立出でる愛「今日は有難い仕合せ」と御禮を申上げる、一「ア、愛之



助殿か、其處で能く聞きなさい……南無阿彌陀佛〳〵」と念佛を唱へて目を眠つて居りましたが、軈てパッチリ兩眼を睜いて、一「大名も乞食も同じ月は月地水火風のうつけ者めら、喝」と仰しやつた、側に聞いて居た、家來共が、何といふ引導があつたものだ、是は驚ろいたと互いに顏を見合せて居る、中に感心したのは本願寺の蓮如上人たつた一人、何故禪師が茲へ若殿愛之助を呼ばれたといふに、一體此の桃井といふ人は奢り增長して居ります人で、人間の死ぬといふ事は貴賤貧富の變りはない、今まで先祖からの賴み寺があるのだから、何も諸宗の僧

侶を呼んで經を上げるのは無益な話しで、若狭之介の心得違ひ、以來親を是習つては往けないから、此の先お前が心得違ひをしないやうにといふ、之は其愛之助への戒しめの引導で、「引導は無事なる中に上げたまい末期の旅に趣むかぬ中」死んで終つたものへ何をいつたつて仕方がない、生きて居る人に言つて聞かせるのが、之がその何よりの引導で、態々愛之助を呼んで禪師が大名も乞食も同じ月は月地水火風のうつけ者めらと仰しやつた夫を蓮如上人は大層感心をなすつた、扨愈よ出棺といふことになり、桃井の玄關先は大混雜、夫に紛れて一休樣が



蓮如上人のお駕籠へ乘つて一足先へ出掛けた、お供方も宜い氣なもので、一休を乘せた儘氣が付かずに金閣寺へ行つて了つた、後へ蓮如上人が出て來て駕籠へ乘らうとすると供方の姿が見えない、驚ろいて家來に聞くと是々、仕方がないから桃井の駕籠へ乘つて乘込んで來ると、玄關先に一休禪師ニコ〳〵笑つてお在なさる、「イヤ蓮如さん、飛んだ疎匆をいたしました、お前さんの乘物へ私が乘つて、嘸お困りなすつたらう、イヤ氣の毒だつた」氣の毒もないものだ、承知の上で乘つて來た癖に……けれども相手が一休だから始末に往けない、ソコで棺桶を

本堂の正面へ持込み、茲で再たび引導といふ事になりました、其時に一休樣が棺桶の前に立つて拂子を打振り、軈て眼を開いて、一「極樂の西方淨土遙かなり迚も行かれん草鞋一足」と仰せられた、是は町人でも大名でも死ねば六堂錢六文に草鞋が一足と定つて居て、大名だからといつて二十足も三十足も入れて行く者はない、一「慈悲もせず、惡事もなさず、死ぬ者は佛も賞めず閻魔咎めず」と又仰せられた、桃井の家來は益々呆れて居る、ソコで葬式も濟んで一休樣は眞珠庵へお歸りになりました。



## 第十八席　水葬禮

扨其年も暮れまして翌年、一人の武士が、武「お賴み申す手前は伊勢國關の北畠伊勢守安次の家來、野路猪惣太と申す者」默齋といふお弟子が申上げるから、一「此方へ同道しなさい」早速お遇になつて、武「さて禪師へ願ひます、手前主人に伜が三人ございまして其内の鶴丸と申しまする者が三月二十四日に病死をいたし、菩提の爲め一ケ寺建立をいたしまする心得、付きましては當時天下の三幅對の噂さの高い、本寶寺の日親上人、本願寺の蓮如上人、

眞珠庵の一休大禪師、處が日親様は遠方へお出でになつてお留守、蓮如様は折柄御病氣で、どうか禪師様のお差圖を願ひたく、伊勢の關の城へお出でを願ひたく、伊勢守並びに奥方綾糸様のお願ひでございます」禪師お聞きになつて、「ア、さうか、イヤ菩提心を起し一寺建立をいたすといふは奇特な志ざし、よし〳〵承知した、だが今直ぐ行く事は出來ん、猪「へエ、「私の氣性として行きたければ明日にも行くかも知れないが、行く氣が出なければ一生でも行かない……」厄介な人だと思つたが、猪「ア、左様で、どうか成べく御都合を遊ばして一日もお早く



お出でを願ひます、「ア、よし〳〵、承知した、猪「では、何分どうぞよろしく……」といつて歸つた、處へ入違ひに蜷川新左衛門が參りまして、新「エ、只今立派な武家が御門を出でましたが、那れは何で、「實は是々だ、新「ハア、お出でになりますか、「行く心算だが、どうじや新左衛門お前一緒に行く氣はないか、新「お供をいたしますが直ぐお歸りになりますか、「イヤ、序に伊勢參りをしてな、白子の觀音へ參詣、東海道の追分へ出でし宮の七里の渡しで尾張へ行つて、那れから名古屋を見物して三州へ出て八ッ橋の古蹟を見物をして、夫から鎌倉へ下つて

甲州街道を身延山を見物をして信濃の善光寺、松本から飛騨の高山を越えて、那れから越前の永平寺へ乗込んで當時天下に名の高い禪敎と一ト問答をして、夫から越後の七不思議を見物して、さうして京都へ歸らうといふ考がへだ」新左衞門も驚ろいた、中々長の道中是は大變だと思つたが、「新委細畏こまりました、お供をいたします、兎角いたしまする應永廿三年四月となり、支度を調のえて一休禪師新左衞門を供に京都をお立ちになりました、尤とも此のお方の事だから扮裝も姿もあつたものでない、一寸見ると乞食坊主のやうだ、新左衞門は武士の事で、



ざいますから兩刀を帶挾んで立派な服裝、何方が供だか分らない、先づ近江八景の中堅田へ出た、右に腰を下ろして、「どうだ新左衞門、之が名高い浮見堂江州觀音寺の觀音、西國二十三番の札所だ、けれども今時落雁はなし、比良の暮雪も往けず、近江八景も見る時が惡いな」と仰しやつて居る處へ、漁師體の者が三人打連れまして甲「エ、其所な御出家、少々お願ひがございます、」「何だ甲「此の村に居ります留五郎といふものが亡なりました、村の者が菩提寺へ埋めてやらうといたしましたが、十五兩の金がなければ叶はぬといふこと、此の留五郎といふ

ものは誠に貧乏でございまして夫だけの金がございません、女房にも相談の上で何か金の費らないやう葬式をしたいといふのでございます、お見受け申せば御出家様のやうで、どうか功徳と思召して引導を渡しては下さいますまいか、「ア、承知した、案内をしなさい、」甲「一緒に行つて引導を渡しては下さいますまいか、「ア、承知した、案内をしなさい、一緒に行つて引導を渡してやらう」甲「有難う存じます、どうかマア宜しくお願ひ申します」三人の漁師が先へ立つて參ります、傍はらに留五郎といふ家で、女房が大きに喜こんで、女「有難う存じます、サ



アどうぞ此方へお通り遊ばして、「ア、お前が女房か、實は私が腹が減て居るから飯を食はして貰ひたい、女「さうでございますか、夫では何にもございませんけれども遠慮なくお喰り下さい」早速膳を持出す、新左衞門も驚ろいた、「サア是へ來てやんなさい……エ、と私が一ッ引導を渡してやらう、どうも貴様の處の菩提寺の坊主は飛んだ心得違ひ、今の坊主は多くさういふ奴ばかりだ、女「あの何でございますか、火葬にいたしますか、土葬にいたしますか、」「夫よりは水葬が宜らう、女「ヘエ、水葬と申しますと、」「船へ乘せて湖水へ出し、湖へ沈めて了

ふ、之が一番だ、　女「オヤさうでございますか、　一「夫がモウ一番手輕だ、決して心配いたさんが宜い、　女「左樣でございますか」どうしたもんだらうといふ、　甲「何にしろいはつしやる通り、夫ぢやア水葬にした方が一番サッパリして宜らう、ではどうぞ願ひます」是から新左衞門も矢張りお供をして艫て漁師が棺桶を船へ入れて漕出す、どんなことをなさるかと禪師の樣子を見て居ると死骸へ向つて何か唱えてお在遊ばしたが、ズイと立つて死骸を差上げた、新左衞門は側で何をするのかとハラ〳〵して居る、一休大音に、一「如何に海底の鱗屑共耳をさらつて能く



聞け、當堅田の浦の漁師、留五郎、息ある中に汝等の友を漁し、妻子を養ない露命を繋ぐ、今命盡きて三十六才にて相果てたり、今其の死骸を海底に沈める、汝の仲間の敵討、此の死骸を食らうべし、是即ち食たり食れたり、誠の佛道といふものである、「喝」と仰せられて又、一「こうさいの瓜や茄子を其儘に手向てなるや淀川の水」といひながら水の中へドンブリと投げ込んだ、他の漁師も之を見て驚ろいた、留五郎の女房は此の樣子を見まして何となく哀しくなつたと見えてワッとばかりに泣き沈む、一「サア〳〵是で宜い〳〵、留五郎極樂往生をした、歸ら

う〳〵」と船を岸へ戻す、處へ通り掛つたのは圓滿院の華榮和尚といふ者、一休樣のお姿を見ると驚ろいて夫へ駈け寄り、華「之はどうも大禪師樣で在つしやいますか、どうして之へお出でになりました――コレ〳〵お前方此方を何誰と思ふ、紫野大德寺の一休大禪師と仰せられる生佛、生如來樣だ、女「エッ、さては噂さに聞きました大德寺の一休樣で、夫とは知らず飛んだ御無禮をいたしました、華「イヤお前方は仕合せだ、斯ういふお方樣に引導を願へば極樂往生いたすに相違ない、有難く御禮を申上げろ、女「有難う存じます」とお名前を聞いてビックリ、



改めて一同より厚く御禮を申上げる。

## 第十九席　乘合船

扨一休樣は新左衞門と共に、其夜は夫へ泊つて翌る朝、三井寺から唐崎の松を見やうと呼び繼ぎの濱へお出でになり、大津の石場から船渡しが出ます、掛茶屋へ腰を下ろして居りますると、○「オーイ、船が出るよ」と客を呼んで居りますが、茲は矢走の船といつて武夫の矢走の渡し早くとも急かば廻れ瀨多の長橋

能く此所には叡山颪しといふ風があつて、時々流される事がある、尤とも夫さへなければ此の船で突切つて行くと大層早いから、マア多くは是へ乗る、ソコで新左衛門と此船へ乗りました、此の渡し船でも桑名の船は非人を三人づゝは只で載せたもので、矢走の方は一人づゝ只載せる、出家でございますから一休様は錢は取らない、乗つて見ると乗合は彼是二十人も居りませうが、新左衛門は固より武士だから大刀へ帶しても他の者が遠慮をして傍へ退く、禪師は新左衛門の前へ安座をして話しをして居る、見ると船頭が、船「オイ坊さん〳〵、」「何だ、船「何



だぢやアねへ、お客様の側へ寄つちやア往けねへやな、引込んで居ねへ、」「ア、さうか、夫は大きに惡かつた、よし〳〵、此方へ乃公が引退る——新左衛門、お前も此方へ來なさい、餘り遠いと話しが見えんから——」新左衛門も此お方は一休禪師といふ譯にも往かず、船頭なぞといふものは口汚なくて困ると思ひながら傍へ寄ると、其處に居たのが山伏、一人は神主、其他十七八人の乗合ひ、一休様が、「コレ〳〵」新左、何と佳い景色だな、分けて今日は風はなし、どうも仕合せだな」新左衛門は只ハイ〳〵といつて居る、スルと神主が、神「オイ坊主、一

「ウム、神「ウムではない、能く貴様は饒舌るな口から税が出ないと思つて宜い加減にしろ、貴様が不絶幕なしに饒舌るので喧ましくつて堪らん、全體日本といふ神國に生れ、坊主になるなどゝは心得違ひな奴だ、以來還俗をして眞の人となれ、先刻から彼の兩刀を差したお方が迷惑がつて居る、夫が貴様には分らんか、大小を差した人は四民の上に立つ武士といつて身分が違ふ、貴様なんぞ世捨て人、世は捨てねども世に捨てられた痩坊主、餘まりぺラ〳〵饒舌るな」一休様も酷いことをいふ奴だと驚ろいたが、「イヤ恐れ入りました、以來は饒舌りますま



いよ、神「ウム、屹度饒舌るな狸坊主」といふと此方に聞いて居りました山伏、癪に障つたものと見えて、山「コレ待て神主、何だと狸坊主とは怪しからんではないか、乗合一同顔を見合つて默つて居た日には、退屈だから各々好な話しをする、何もお前へ話しを仕掛けなかつたら、喧ましいも騒々しいもあるまい、餘計な咎め立てをさつしやらんが宜い、『神の戸を開いて見れば幣ばかり參る心に神ぞ在ます、』『神といふものはあるものでない、正直の頭に神は宿ると』いふ、正直の人の頭のなかりせば、數多の神の宿無しもあり、要らざる咎め立てをして狸坊主なん

て憎まれ口を聞くと、他で聞いて居つても誠に聞き憎くつて往かん、私は鎌倉不動院の門下、當時近江國八日市の太郎坊を守護する修驗、大日坊仙橋と申す者だ、見受ける處其方は神主のやうだが何處の神主だ、マゴ〳〵すると不動の金縛り、珠數繫ぎにするからさう思へ、神「ナニ言はして置けば、不埒至極、私は近江國一の宮、此の船が彼岸へ着けば我家も同然だ、建部大明神を守護する御朱印千百石を賜はる神主、官幣大社今宮内記と申す者だ、不埒な山伏、彼是申すに於ては其分に捨置かん、要らざる處へ口出しをし居つて、問答をいたすとなら問答



をして遣はす、腕力なれば腕力で勝負をしてやる」一休禪師之を聞いて、「イヤ是は面白いな、ヤレ〳〵、何方も負けてはならん、山伏負けるな、神主負けるな、ハッケヨイ〳〵」他の乘合が、○「モシ〳〵冗談ぢやアない、皆なお前さんの事から起つた喧嘩だ、夫をけし掛けちやア往けない、」「ア、さうだな、○「さうだもないもんだ：：モシ神主さん山伏さん、御同樣に一ッ船へ乘合ふといふのも何かの緣だらう、袖摺合ふも他生の緣、躓づく石も緣の端、詰らない事で目くじり立つて諍そふことはない、お互ひにニッコリ笑つて勘辨なさい、ねえ、そんな

ことで言ひ合つた日には際限がない、サア〳〵仲直りを……」といつたが中々どうして何方も聞かない、猛り立つて論に花が咲く、一休様は面白い〳〵と手を拍つて喜こんで居る、茲に今宮内記、大日坊が大議論をするといふお話し。

## 第二十席　修驗の化の皮

時に神主が、「神何と修驗、恐れ多くも天朝御代々の御定紋、十六葉の菊、替紋に櫻をお用ひになるは、どういふ次第か貴様知つて居るか、これは筑前國脊振山の頂きに



疊二疊敷ほどの自然石がある。其石に十六葉の菊を現はし、其の傍はらの櫻が五色に咲いて居る、されば此の菊を以て御紋となし、替紋に櫻を用ひる、花の王と書いて櫻と讀む、又藏人古峯の宗貞朝廷へ忠義を盡したもの後に僧正遍照、此者帝へお別れ申した時に「深草の野邊の櫻の心あらば此春ばかり墨染に咲け」といふ一首の歌を詠んだ、然るに櫻が黑の如くに眞黑に咲いた、夫より深草の地名を墨染といふ、どうだ歌は神國の寶といふが貴様は知るまい」といはれて山伏が閉口をして了つた、眞赤になつて何ともいへない樣子だから、一休禪師が傍はら

から、「コレ〳〵神主、貴様は中々理屈をいふが、そんなことは佛法にもある、吉備大臣入唐して歸朝の砌り、唐土より魔王渡つて來て疱瘡を流行せた、此時に行基菩薩、右の石を三の關へ引いて其櫻にて藥師如來を刻んで右の石の上に安置して疱瘡の退散を祈念をした、夫つき り流行病が止んだ、今の石藥師といふ、又西國二十七番の札所播磨國書寫山圓敎寺の本尊は櫻だ、大地より生たなりに觀世音を刻み、枝で四天王を刻む細工人は正空上人、斯ういふ事があるがどうだ神主、外記とは外を記す其方は内記と申す名だ、日本の國の事を知らないでは濟



むまい、又伊勢の白子に小野道風の娘に命比賣といふものがあつて、觀世音を信仰して天照宮へ女人成佛が出來るか出來ないか、奇瑞を現はし玉へと祈つた時に其方が居る境内櫻の咲く時は女人成佛を出來ると心得ろといふ神託、白子の觀音の櫻、雪の中に咲いて之を不斷櫻といふ、誓いあるいつも櫻の花なれや見る人さへも常盤なるらん、斯ういふ事がある、どうだ神主、答いがあるか」禪師が立てつけて仰せられると、神主恐れ入つて何とも返事が出來なくなつた、すると眞赤になつて居りました山伏の仙橋喜こんで、「イヤ坊さん感心〳〵、大層どう

もいろ〳〵な事を知つて在つしやる、どうだ神官、佛道の宏大なのには驚ろき入つたらう、此上は斯ういふ山伏が法力を以て不動明王を此處へ現して見せる、どうだ」之を聞くと乘合が、甲「どうも大變な事になつて來た、那の山伏が不動樣を玆へ現すといひましたが、そんな事が出來ますか、乙「サアどういふものでげすか見て居りませう」其内に仙橋が靈驗著かの念珠を振てさら〳〵と押揉み、大きな聲で拜み初めた、東方には剛三世夜叉明王、西方には大威德夜叉明王、南方には軍陀利夜叉明王、北方には金剛夜叉明王、中央には大日大聖不動明王と祈り



始めた、一休禪師手を叩いて笑ひ、「ウンデレガンノどう畜生……」と混ッ返して在つしやるから、蜷川新左衞門が、何にしろ厄介な事が出來したと困つた顏をして居る、該の山伏が一生懸命に汗を流して祈り立て〳〵すると、這は开も如何に、不動明王の神體其處へ現はれました、脊に火燄を脊負ひ、手に降魔の利劍、縛の繩を持つて其處へ現はれ給ふ、サア乘合の者一同に驚ろいた、丙「どうも大層な法力ぢやアないか、有難や不動明王、曩漠三陀哷……」中には夢中になつてお捻りを投る人がある、一休禪師大口開いてカラ〳〵と笑つた、山伏が振返

つて、山「坊主、何を笑ふ、失敬千萬な、何が可笑くつて笑つた、」「可笑いから笑ふのがどうした、」山「イヤ不届きな奴、何が可笑い」と今度は禪師へ喰て掛つた、乘合が丙「ソレ又始まつた、今度は同志打、味方の喧嘩だ……、」「コレ修驗、貴樣は神主と諍つて勝たからといつて、頼みもしない、己れに誇つて何も不動尊を引合に出すには及ばんではないか、貴樣は山師だな、そんなことをして」は往かんて、山『ナニ山師だ……「不埒な事をいふ奴だ、山師とは何だ、口の横に裂けたるまゝに捨置き難い處の言葉を放つ、汝左樣なことを申すなら、此不動尊を消す事



が出來るかどうた、」「ハ、、、、、、、、馬鹿をいへ、尊とひ經文などを讀み上げないでも、乃公が小便をすれば忽ち此の不動は消えて了ふ、山「ナニ消す者に事をかいて、小便で消すとはイヤ不届き千萬な事を申す奴だ、サア速やかに消して見ろ、」「ウムさういふなら乃公が消から驚ろくな」聽てズッと前へお進みになつて、口に何か呪文を唱え、シャア〳〵やり始めた。スルと這は如何に不動のお姿が湖の中へスーッと沈んで了つた、」「どうだ山師、恐れ入つたか」乘合の者が之を見て、○「どうだへ不思議な事があるものだ、言つた通り那の坊主の小便で不動樣

が消えて了つた、どうも不思議な船へ乘合して面白い」と尙も固唾を呑んで双方の顏を見て居ります、仙橋は眞赤になつて怒つたが仕方がない、山「坊主、貴樣は何宗だ」一「乃公は八宗兼學だ、山「何だといつて、乃公が折角祈り出した不動樣を消して了つた、」一「貴樣が消せといつたから消したがどうした、頼まれもしないに何もお姿を此んな處へ現はす奴があるか、慰さみに祈り出した不動なら消えもする、別に不思議はない、不動とは動かず明らか、所謂人間の精神を祀ッたものだ、脊の火燄は人間の心の燃えぬやう、手に持つ繩は惡しきを戒しめる、夫を慰さみ



にいたすから乃公が消して了つた、以來斯る心得違をするな、山「然らば坊主問答いたすが答へるか、一「何んでも持つて來い、貴樣のいふ位ゐな事は答えの出來ぬ乃公でもない、仙「宜し、然らば近江にあつても唐崎とは如何に一「ハ、、、、、近江八景で來たな所柄だけに、日本で出來ても唐傘といふが如し、仙「ウム、土で出來たるを石山とは如何に、一「徐かに行くも矢走といふが如し、仙「此の坊主めが口の減らん奴た、然らば此の船を止める事が出來るか、一「ウム貴樣にやれるか、仙「如何にも留めて見せる、驚ろくな」と又仙橋が祈り始めた、乘合は驚ろくまい事

か他のことは宜いけれども船を留められては此方等が困るといつて居るが、船は些とも留りません、相變らず走つて居る、禪師が、「山師どうしたのだ、船が止らんではないか、そんな祈りやうでは駄目だ、今乃公が止めて見せる」山伏は仕方がないから跡へ退つて、仙「サア坊主、貴樣が止めて見ろ、」「マア待て、」仙「早くやれ、」「靜かにしろ、今止めて見せる」といつて居る中に船は順風で遂々草津の宿へ着いた、「ホーラ、どうだへ山伏、留つたらう、」仙「ナニ、」「船が留つたらうよ、」仙「止るのは當然だ」「當然でも止つたらう、な、幾ら貴樣が法力で止めやうとしても走つて居る船が止まるものか、乃公は止めるやうにして止める、何と乘合一同恐れ入つたか……」圖太しい坊主だ、之なら誰だつて出來る、其中にゾロ〳〵船から上つて思ひ〳〵に行つて了つた、禪師が上つて來ると後ろから、○「エ、夫へお出でなさいますのは禪師ではございませんか」振返つて見ると紅屋久兵衛た、「うむ紅屋か、何處へ行く、」久「どうもお珍らしい處で、私は先月東の方へ參りまして、今戻り道でございます、」「ア、さうか、」久「禪師は何方へ、」「私か、私は足の向いた方へ……、」久「之は恐れ入りました、マア行つて入らつしやい」と別れて

行く、山伏の仙橋が聞くともなしに聞くと禪師といふのが耳へ入つた、サア大變だ、是は何でも身分の重い人に違ひないと少し驚ろいて、仙「エ、モシ〳〵一寸伺がひますが……」新左衞門が、新「何だ、仙「那の坊さんは一體何誰でございます、新「あれか、那れは京都紫野大德寺一休大和尚だ、仙「へエ……、イヤ知らぬことゝは申しながら飛んだ失禮を申し上げました、どうか御勘辨を……；

一「イヤ仙橋、旅の耻は何とか、勘辨も何もない、貴樣は何處へ行く、仙「之から伊勢路へ參る心算で、一「乃公も那方へ行く、どうだ一緒に行かうか、仙「エ、お供をいたし



ませう」と之から來たのは草津の本陣、一「ア、草臥た、コレ〳〵仙橋、仙「エ、一「どうか草鞋を脱がして呉れ、○「ハイ、一「洗足を持つて來な、仙「へエ」無暗に用を言附る、仙橋が何ぼ一休禪師だつて人を奴僕の如くにこき使ふのは餘まりだ、何か一番返報をしてやらうと考がへて一休樣が風呂へ行つた留守へ亭主を呼んで、仙「扨亭主、那の一休禪師と仰しやるお方は大層お能の名人だ、私からも賴んでやるが一ッ能を願つて拜見をしろ、亭「へえ、左樣でございますか、さういふ事なら是非拜見をしたいもので、どうか貴所からも宜しく願て頂だきたい、仙「ア

、宜いとも」ソコで本陣の主人が一休様へ是非といつて願つた、禪師は早くも仙橋の惡企みといふことを知つて居りますから、「よし〳〵、見せてやる支度をしなさい」と快よく受合つた。

## 第二十二席　禪師の御能舞

ソコで本陣の主人が發起で、小屋掛け、大皷小鼓、地謠ひ笛、スツカリ用意をして、來る何日京都大德寺の一休大禪師、何處に於て能を舞ふから來つて見ろといふこと、當日は近郷近在から一休様の能を拜見しやうといふので、



擧つて出て來た、本陣の主人か一休様の前へ出て、亭「エ、支度も整えましたが、何を遊ばします、どうか御得意の物を……エ、高砂、春日、龍神、安宅……、」「イヤ私が得意とするのは鈴木三郎が紀州の和歌の浦から奥州の衣川まで七度使をするといふ面白い能だ、亭「へエ　」「夫をやろう、就ては舞臺へ握飯と煮染を持つて來て貰ひたい亭「畏こまりました」仙橋は手を拍つて喜こんで居る、夫に引替へ蜷川新左衛門は心配をして、新「エ、禪師、」「何だ、新「貴所に能が……、」「イヤ心配するな、大丈夫だ」と御當人は平氣なもの、左右する中に愈よ其の時刻とな

つた、禪師に於てはヌッと舞臺へ立出で、法衣を高く褰げ、竹の枝を担いで鳥家口から、「是は鈴木の三郎重家奥州衣川までの使ひに候……」高らかに仰しやると杖を担いで、「エッサッサ、エッサッサ」と舞臺の上で駈出して、機を織るやうに行つたり來たり、軈て竹の皮包みの握り飯をムシャ〳〵食つて、又エッサッサ〳〵と駈け出し、又休んで飯を食ひ、舞臺の上を駈けて歩く、一ッ事を幾度も〳〵やるからサア見物は驚ろいて了つた、○「何だ詰らない、一ッ事ばかりやつて居る、此んな能は始めてだ、アーアー……」大きな欠伸をした、禪師が見咎め



て、「誰だ今欠伸をした者は、是はな、紀州から奥州まで七度使ひを勤める、其里程が何の位あると思ふ、どうしても十五日は掛る、其間は毎日〳〵斯うして、其の彼衣川へ參つて使ひの樣子を物語る、先づ夫までは大人しく見て居れ、モウ之へ參つたからは一人も歸すことはならんからさう思へ」イヤ見物は驚ろくまい事か、「金之は大變だ、十五日も見せられた日には大概參つて了ふ、どうしたのだらう」と互ひに顔を見合して欝いで居る、不動院仙橋は驚ろいた、是は大變、十五日も是へ引留められた日には堪らないから、新左衞門に、「仙さて貴所か

ら宜しくお詫びを申上げて、どうか私は茲でお暇を頂だきたい、新「さうか、用があつて行くといふなら仕方がないが、元は皆なお前から起つた事だ、併し禪師は遣り掛けたことだから飽までやんなさる、十日だけの宿錢を拂つて行きなさい、さうすれば許してやる、仙「最と易いことで、どうか手前は御免を被むる」と仙橋も仕方がないから十日分の宿錢を置いて裏口から逃げて了つた、此方は一休樣、エッサッサ〳〵とやつて居ると新左衞門が、新「エ、少〻お待ち下さい、」「何だ、新「只今仙橋が斯樣斯樣申して出立をいたしました、モウお止めなすつても宜



うございませう、」「ア、さうか……イヤ一同の者嘸驚いたらう、幾ら宿錢を取つた、新「エ、十日分を取つて置きました、」「夫は少ない、三十日ぶりも取つてやれば宜かつたに、併し彼が居なければモウ止めだ、亭主を呼べ」本陣の亭主が其處へやつて來た、「エ、仙橋といふ者が居ないさうだからモウ之は止めにする、一同の者は勝手に引取つて宜い、夫とも强つて見たくば十五日茲に控えて居れ」誰が見たいものか、嬉し喜こんで歸つて了つた、ソコで本陣の主人が、五「どうも飛んだ失禮を申上げ、何とも相濟みません」お詫をいたすと禪師お笑ひなすつて

居る。

## 第二十二席　世界一ぱいの阿彌陀笠

翌日草津を御出立になつて土山の並木へ掛ると向ふから、ヱ、下に居ろ〳〵といふ下座觸れ、見ると赤松播磨守、供方二百人ばかりで之へ通り掛つた、新左衞門之れを見て、「新禪師、惡い處へ通り掛りました、向ふから赤松が參りました、私は是へ隱れて居りませう、」「さうか、ではさうしなさい」新左衞門は傍道へ入つて居る、禪師は往來の眞中に平氣で在つしやると、△「コレ〳〵下に居れ、



坊主下に居れ、」「イヤ苦しふない、△「ナニ、」「苦しふないよ、△「お前の方は苦しふなからうが此方が苦しい、下に居ろ〳〵……餘程圖太しい坊主で中々下に居らん、どうしたものだらうな、△「さうさ、マア殿樣へ申上げて見やう」赤松播磨守へ申上げると、播「イヤ出家は世外者、捨て置け〳〵、併し見受ける處笠がないやうだ、長の道中嘸難儀のことであらう、笠一かいを遣はせ、侍「ハ、ッ」一人の若侍が飛んで來て、侍「御出家、」「何だ、」侍「長の道中笠がなくてはお困りであらう、笠一かいを進上いたす有難くお受けなさい、」「イヤお志ざしは千萬忝じけない

が、笠は被つて居るから二重には被れない、侍「へエ、何處に被つてお在なさる、」「此所にチヤンと被つて居る、侍「へエー、手前共が見た處ではどうも被つて居ないやうに見えますが……、」「お前達は眼が惡いから分らん、モツと大きな笠を被つて居る、世界一ぱいの阿彌陀笠といふものだ、別に笠は要らん、」播磨にさういへ」ソコで之を告げると、播「ナニ世界一ぱいの阿彌陀笠を被つて居る……成程面白いことを申す奴だ、捨て置け〳〵」と土山の本陣へお泊りになつた、「新左衞門モウ行つて了つた私と一緒にお出で、」新「何方へ入らしやいます、」「今夜は



播磨の跡を追つて本陣へ參つて赤松に馳走にならう、新「夫はお止しなすつたが宜うございませう、」「イヤ播はん、宜いから跡へ付いてお出で」軈て本陣の玄關へ來て「頼む〳〵」亭主が出て來て、主「エー此處は本陣で、お前さん達の泊る處ではない、モツト下へ行くと木賃宿があるから其處へ行きなさい、」「イヤ〳〵決して心配には及ばん、主「況して今日は赤松樣のお泊りだ、」「イヤ其赤松に會へば分る、同宿をする者だから、主「イヤ是は氣が違つて居る、本氣ぢやアない、何にしろマア扣へて居さつしやい」之を播磨へ告げると、播「アヽさうか、夫では

先刻の坊主に違ひない、金吾斯様申せ、同宿をいたすなら笠を被つたまゝ座敷へ入られては困る、笠を取つて上んなさいと斯ういへ、金「ヘエ」近習出て來て、金「イヤ先刻の出家か同宿をいたしても宜いが、笠を被つて居ては入られまい、笠を取つて入れ、」「ア、赤松も中々にやり居るな、脱でも宜いが置き所があるまい……」反對にやられた、金「暫らく扣へなさい」播磨守へいふと、播「ナニ脱いでも置き所がない、成程さうだな、忌々しい事を申す奴だ、然らば此方へ通すが宜い、金「御出家通んなさい」「ア、さうか、サア新左衛門上らう」座敷へ上つて則へ



行くと湯殿がある、見ると黒塗に金蒔繪をした風呂がある、丁度沸て居るやうだから、是は幸はひと禪師一風呂お入りなすつて座敷へ戻ると若侍が、侍「エ、主人が會はふと仰しやる、早々通らつしやい、」「ア、さうか、案内をしろ」新左衛門を連れて座敷へ通る、「イヤ播磨殿、」始めてお目に掛る、私は大德寺の一休だ」見ると赤松播磨も驚ろいた、側に蜷川新左衛門が付いて居る、播「是は始めましてお目通りをいたす、豫て聞き及ぶ一休大禪師様に在つしやいますか、どうか失禮の段は平に御用捨を播「コレ〳〵」新左衛門殿、貴公が付いて居られながら、何

で斯樣なことをいたされる、禪師なら禪師と何故早くいつて下さらん」新左衞門はきま的が惡いから、禪師の後ろへ下つて顏を反けて了つた、播「サアどうか之へ」禪師を正座へ直して播磨守が下座へ下つたから家來は庭へ飛び出して了つた、一「時に播磨殿が、先刻お通りになつた時に、百姓町人が大分呟いて居つた、どうも那の下に〳〵といふのは宜くない、先供から下に居れといはれた日には、用の間を欠いて了はなければならん、下々の者は誠に難儀をいたすから、以來宿人の節は輿物の通るだけ下に〳〵で宜しからう、少しは下の者を勞はつてやんなさ



らなければ往かん、播「誠に恐れ入りました、實は駕籠の中で前後不覺に眠り居りまして少しも心付きません、以來は屹度改めます、一「ハア、駕籠の中で前後も知らず寢て居つた、夫はどうも困つたもんだな、そんなことでは京都に居つて西三十三ケ國の政治はチト覺束ないぞ、播磨殿、播「誠に恐れ入りました、二「夫から又、宿屋へ着けば、風呂といふものは大體の家にある、夫を出來るからといつて道中風呂を持つて歩くといふは實に不都合だ、以來チト嗜なまつしやい、播「之はハヤ誠に何で、恐れ入りました、草々取毀すやういたします……、コレ〳〵家

來共、禪師が御覽になる前で風呂を毀して了へ、家「畏こまりました」ソコで赤松の家來が結搆な黑塗の風呂を毀したが、一休樣は宜いが赤松はまだ湯へ入らない、之から入らうといふ前に風呂を打毀して了つた、ソコで結搆な料理を取寄せて御馳走をいたしますから、禪師は遠慮もなく馳走になり、「イヤどうも宜い處で播磨お前に會つて此んな目出度い事はない、是が本當の目出度〳〵の赤松さまよ……」一休禪師洒落て居る、播磨守も弱つて了つた、此の對手をいたした日には堪らないから、翌る朝、夜の明けない中に本陣を立つて了つた、立波禪正と



いふ家來が一人殘つて居りまして、翌朝禪師のお座敷へ來て、彈「さて主人儀は急用出來いたし、手前を當家へ留め置きまして先へ出立を仕つりました、御悠りと御滯在遊ばしますやう、」「アーさうか、イヤ私も茲に何日までも居られないから出立をいたすであらう、併し私共は旅籠代がないから其心算で、彈「畏こまりました」仕方がないから彈正が金を拂つて出立をした。

扨禪師に於ては土山の本陣を出立をして、東海道を下つて關の城へ參りました、尤とも之は只今の關の城ではない、是は人皇四十五代、聖武天皇の御宇、正法七年九月

十三日遠州灘七十五里大海嘯、諸所難儀をいたした、ソコで諸所へ關といふものを立つた、一の關が桑名、二の關が四日市、三の關が石の藥師、四の關が庄野、五の關が龜山、六の關が關、七の關が相の宿、八の關が鈴鹿山此の山の上に關の城といふのがあつて、之は出城、本名は笠置の城、本城は伊勢の松坂にあつて、之を後に龜山へ引いた、其の笠置の城へ乘り込んで來た、北畠伊勢の守安次といふ人は豫て蜷川新左工門とは知合ひでございますから、早速城内へ此段を申入れまする、伊勢守大に喜こんで、直ぐ禪師にお目通りをして、さうして鶴丸菩



提の爲めに一寺建立をいたしたい、どうか宜しく禪師にお差圖を願いたいといふ、茲で禪師が、イヤどうも心得違ひなのは伊勢守、彼に一ツ意見をして呉れやうと、茲に一休が名代の關の地藏を刻むといふお話し。

## 第二十三席　關の地藏

一休禪師は新左工門を連れて關の城へ乘込んで參りました、茲は北畠伊勢守安次の居城、早速本丸へお通し申した、安次禪師へお目通りをして、叮嚀に御禮を申上げる、御供をして參りました蜷川新左工門、是は從前から安次も

存じて居りまするゆゑ、萬事に都合好く、宜うこそお在になつたと先づ善美を盡して御馳走をいたす事になり、就きまして昨年伴鶴丸が七歳で病死をいたし、誠に不便な事をいたした、どうか後世菩提を弔らひまする爲め、一寺建立をいたし、入佛供養をいたす心得、どうか宜しく御差圖を願いますといふと禪師が、「イヤ夫れは誠に宜い考がへではあるが、併し當時日本國中に寺の數は九十五萬九千四十四ある、チト多過ぎる位ゐ、尊公の家にも只今までの菩提所があらうから、其の菩提所で宜しからう、一體當家の菩提寺は何方だ、伊「左樣、伊勢街道椋



本の宿、寶藏院と申します、當寺住持を大仙和尚と申します、之が菩提所でございまするが、どうか鶴丸菩提の爲め天下の名僧を以て法事をいたしたく、夫ゆゑ態々禪師を御招待いたしました次第、摸樣に依つては改宗いたしても仔細ございません、「イヤ夫は往かんて、何の宗旨でも構はない、兎に角寶藏院を見やう」ソコデ翌日になつて禪師椋本へ來て見ると、昔しはどこも立派な大寺でございましたが、只今では本堂はなくなつて愛染明王と繪馬堂がありまするだけ、いやどうも非常の大破をして居る、檀家には北畠伊勢守といふ大名がありながら

「此の體裁、一體北畠安次は佛法を信仰のないものと見える、今度愛子を失なつたので、夫か爲めに急に心が動いて信仰を始めた、ソコで一休樣が立歸りまして、二「さて那れは何日頃燒失をいたした、伊「左樣でござる、其昔し田村將軍か鈴鹿山へ押出し、賊軍を破りました時に兵火の爲めに燒かれまして、其儘になつて居る、二「ア、さうか、就て人間は十一才までは勸めといふものはないとしてある、十一才から君に仕へる、されば人偏に十一と書いて仕へると讀む、夫が爲め十一才未滿で死ぬと賽の河原といふ處へ行つて石を積んで遊ぶ、スルと鬼が出て來て鐵



の棒を振廻して子供を苛める、其時に地藏菩薩が鬼を追拂ふ、七才の鶴丸の菩提の爲めなれば寺には地藏尊を本尊といたしたが宜らう、新「ハ、ッ、御尤ともの御言葉、シテ木佛金佛、又は石佛にいたしまするか、二「イヤ私が紙へ書へて進上しやう、伊「エ、唐土楚の國妙見山の山中にございましたる栴檀を、先年長崎表に於て交易をいたしました、此の木で地藏尊を拵らへては如何なもので、二「ア、さうか」といつて一休樣がお考がへなすつた、愛子を失なつて當人は目が瞞んで居る、幾ら意見をしても用いる氣支ひない、北畠は伊勢の大領主、名代の金持ゆゑ、

斯ういふ時にドシ〳〵金を使はしてやれ、其頃都で佛師の名人といふは光慶、けれども是は金滿家であるから、高い處へ土持をするやうなもの腕はどうでも功德の爲め貧乏な奴に此の仕事をさせてやらう、スルと茲に千本通り一條下る處に佐々木金吾則村といふ日本一の下手な佛師がある、貧乏は一通りではなく、時々大德寺などへも出入りをする、一休樣が此の則村を一ツ者にしてやらうと思つたから、「では京都一條下る處に佐々木金吾則村といふ佛師の名人が居る、此の者を呼寄せて地藏を造らせるが宜らう、私が書面を書てやる、日本佛師の元祖は



人皇三十一代敏達帝の御宇、近江國坂田郡、今鳥村と殘つて居るが、鳥を造らへた時に時を造つた、鳥佛師といふ名人、其末孫で佐々木金吾、氣に入らなければ決して彫らん、私が賴めば屹度來る、けれども腕は宜いが貧乏だから、支度金を三百兩ばかり持つて行つてやんなさい」と一休樣が眞しやかに仰しやるから、ソコで野路猪惣次といふ家來が三百兩を襟に掛けて遙々都へ出て諸方を聞いたが分らない其筈で、日本一の上手な佛師だから分る譯がない、尋ね〳〵て漸やう家が分つて來て見ると成程貧乏人らしい、ソコで訪れて是々といふと金吾は大きに

喜こんで、其の支度金で支度をいたし、野路猪と打連て笠置の城へ同道いたしました、先づ一休様にお目に掛つて厚く御禮を申上げると一休禪師が、「扨金吾、例も相變らず其方も貧乏だらうな、」金「恐れ入ります、仰せの通り、」「さうだらう、所で金儲けをさして、以來樂にしてやらう、で、地藏の座像を造らへて貰いたい、お前に旨く造へろといつてはチト無理だが、どんなでも構はない、一ッやつて見て呉れ、」金「ヘエ左樣で、」「出來るだらうな」「夫がその何で、所謂故ゆゑに……、」「ナニ、」金「夫れがその……、」「出來ないといふのか、」金「マアそんなものでは



ないい、佛師として地藏の像が出來んといふのは不都合だ、」金「でもございませうが出來ません、私は仕入れものゝ釋迦の立像ばかり造らへて居りましたから、」「迚も出來さうもございません、」「夫れは困つた佛師だな、では斯うしろ、新左衞門と乃公が手傳つて造らへやう、ナニ形さへ出來れば宜い、人が見ると貴樣の金儲けが出來ないから宜しく乃公が誰も見ないやうにしてやる」、ソコで伊勢守を呼んで、「彌よ金吾則村が地藏菩薩を造らへる、就ては山の奥、清淨の地を選んで小屋を掛け、夫へ私が共に參つて一刀三禮に及んで刻むから、